
幻想郷の白き魔女【リメイク】

ひろっさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想郷の白き魔女【リメイク】

【Nコード】

N1341BA

【作者名】

ひろっさん

【あらすじ】

これは『魔法少女リリカルなのは』シリーズの二次創作小説です。転生、女オリ主、チート、原作改変ものです。主人公最強も入るかもしれませんが。

女主人公、ピュアが迷い込んだ場所は『時の庭園』。

基本的に原作キャラに心配されたり心配したりしながら、様々な問題を解決していこうという物語です。

ただし、残酷な描写が不意に出てくる場合がありますので、閲覧の際には充分ご注意ください。

それでいいという人だけとか、細かいことは言いませんが、自己責任でお願いします。

これは拙作『魔法少女リリカルなのは 幻想郷の白き魔女』のリメイクですので、ほぼ同じ展開があることをご了承ください。

第0話 プロローグ

幻想郷『アルハザード』。

現代に繋がる魔法文明の祖にして、虚数空間の奥深くに封印された、魔法技術の理想郷。

そこには幾つもの世界を滅ぼせる、恐るべきエネルギーを秘めた魔法具や、永遠の命を実現する夢のような技術が眠っているといわれる。

そこは、運命に惹かれた者だけが到達できた。
そして到達者の多くは、ある1つの技術を求める。

それは死者蘇生。

『アルハザード』以外にも様々に研究が行なわれ、しかし、実現した例は皆無。

『アルハザード』には確かにそれが存在する。
外の世界のような紛い物ではなく、本物の蘇生法が。

しかしならば、なぜこの摩天楼には絶望にうずくまり、座してただ死を待つ人間が数多いのだろうか。

そのことに少しでも気付くことができたなら、後の悲劇は回避できたかもしれない。

悲劇で終わることができたかもしれない。

腐敗しないように、保存液に浸された、黒髪の幼い少女の遺体。
ケースを抱えるのは、同じく黒髪の、半面に青い痣のある女性。

母親だった。

彼女は摩天楼の一室に籠り、脇目も振らずに研究し続けた。
不老不死、蘇生、魂の帰還。

そして目的の、自分に理解できる蘇生技術を発見する。

娘が動き出したとき、母親は我が子を抱き締めて泣いた。
幼い娘の瞳が白く濁り、視力を失ったことなど、些事に過ぎなかった。

すぐに、知っている魔法で擬似視力を与える。
慣れるまでに多少は時間がかかるが、自分達にはたつぷり時間がある。

しかし、幸せな時間は長くは続かなかった。

数日後、娘が体調を崩す。

原因は、蘇生によってある特殊能力レフスキルに目覚めたことだった。

『エモーショナル・レセプション
情動感応』

それは他人の、感情の動きを読み取る能力。

当時彼女らが住んでいた摩天楼には、永遠の命や蘇生に失敗して生きる氣力を失った多くの渡航者が存在していた。

そんな絶望に染まった心の声が、直接娘の脳に送り込まれていたのである。

数日は母の狂喜が守っていたが、いずれは感情も落ち着いてくるため、守護にも限界がある。

日に日に容態が悪化していく娘に焦りを覚えながら、母親は『エモーショナル・レセプション
情動感応』

感応』を封じる方法を探す。

知っている魔法ではほとんど効果が無かったため、かなり強力な封印でなければならぬ。

運良く、1週間ほどで強力な封印力を持つ魔法具を発見した。

最早一刻の猶予もない。

母親は安全確認もそこそこに、その魔法具を娘の身体に埋め込み、起動した。

娘の容態は落ち着き、次第に回復していく。

それから半年ほどは幸せだった。

母親は愛情を注いで色々なことを教え、娘は教わったことを真綿が水を吸うように次々と吸収する。

娘は天才的だった。

母親はその才能を喜び、自分のすべてを伝えようとし、また娘はそれによく応えた。

原則として、『アルハザード』には脱出する手段というものがないいや、あるにはあるのだが、生身の人間が使えるようにはできていないのだ。

そして、外から持ち込まれたような手段では、脱出は不可能だった。

ただ、衣食住について高いレベルで管理されたものが供給されており、早急に脱出する必要性もない。

少なくともこの母娘にとっては、この半年間は安寧な空間だったのだ。

この母娘は『アルハザード』を訪れた中では、数少ない成功例と言

えたかも知れない。

半年後のある日までは。

「私は に帰らねばならんのだ。 なんとかしても」
『を
倒さねば、ここへ来た意味が無い」

1人の男が母娘の元を訪れ、言った。

多く『アルハザード』を訪れた者の中で、死者蘇生を目的とせず、
また永遠の命も求めず、ただ刹那の力を求めた男。

彼は自分の娘を蘇らせることに成功した、ほぼ唯一話ができそうな
人間に、自分の目的を手伝ってもらおうとした。

てつきり、『アルハザード』の住人ならば、その技術に詳しいもの
だと思い込んでいたらしい。

しかし、期待は裏切られる。

元々、母娘は『アルハザード』へ来て、そう年数が経っていない。
膨大な量の技術のすべてに目を通す時間も理由も、2人にはなかった
のである。

男の祖国は戦争を行っており、自分も力になれるような、そんな
技術を求めて『アルハザード』渡航を決行した。

王の理想を実現し、多くの次元世界を傘下に収めた大帝国を築くた
めに。

ところが、『アルハザード』から元の世界へ帰還する方法がない。
これでは本末転倒だ。

男は母親を脅し、帰還する方法を探させる。
自分は目ばしい魔法具を集めるために時間を費やした。

だが、結論は変わらず。

虚数空間と呼ばれる領域を逆行するような、そんな方法は存在しなかった。

逆に、『アルハザード』の封印がどのように行なわれたのかが判明した。

次元断層、つまり虚数空間に放り込む。

それ自体が封印だったのである。

途中に虚数空間つまり魔力が力を失う領域があり、『底』から上する方法がない。

『アルハザード』に眠る膨大な数の超技術ですら、虚数空間を越えることができない。

だからこそ、この方法で『封印』が行なわれたのだ。

ここへ辿り着くまでは封印の存在を明かされず、そして探そうにも性質上内部にその技術は遺されていない。

話を聞いた男は、力なくうなだれる。

男は娘を連れ去った。

帰る方法が見つからない以上、『アルハザード』から目標を殺す方法を探るしかない。

そしてその方法を、彼は見つけ出していたのだ。

その方法とは、娘に埋め込まれた魔法具の封印を解き、他者に『接

続』を行うことである。

その魔法具はそもそも、特定の魔法効果を遠隔発生させるもので、次元を超えて対象に『接続』することが出来る。

応用すれば、選択した対象に攻撃魔法を打ち込むこともできた。

ただし、対象が正しく選択されているかどうかはわからない。

母親は娘の肉体に埋め込むことで、娘1人だけは正しく選択できるようにした。

それをすべて自分に向けることで、娘は他者との接続を希薄にし、『エモーショナル・レセプション情動感応』を封じていたのだ。

だから、悲劇はここから始まった。

強力な『エモーショナル・レセプション情動感応』は、その魔法具の正しい対象選択を可能にしてみせたのである。

同時にそれは、『エモーショナル・レセプション情動感応』によって選択された対象の、死に際の絶望や怨念をその身に受けるということでもあった。

母親は血眼になって娘を探した。

発見したとき、娘は大量の髪の毛が抜け落ち、肌から色素が抜け落ち、うずくまって痙攣していた。

床には吐瀉としゃされた汚物が吐き散らかされている。隣には、目的を達成して高笑いを上げる男。

母親は男が行ったことを理解し、油断している男を護身用に持っていたナイフで背中から刺し殺した。

それから、辛く長い日々が続く。

眠ると叫び声を上げ、母に縋り付いてガタガタと震える娘。

食事もまともに摂れず、栄養は点滴で補給するしかなかった。

身体はどんどん痩せ細っていく。

なにより辛いのは、精神的な病であるため、治すには時間による自然治癒に任せるしかない点である。

向精神薬も精神安定剤も、根本的な解決にはならないのだ。

そして。

「お母さん、お願い、わたしを殺して」

娘は懇願した。

娘の死体が消え去るのを見て、最後の過ちを悟った母親は自分の首筋にナイフを当てた。

男を殺し、娘に死を贈ったそのナイフを。

こうして、母娘の物語は幕を閉じた。

悲劇は幕を閉じた。

幸せな生活を送っていた頃、ある1人の『アルハザード』渡航者の最期を2人は看取った。

幸せな生活を送る2人に気付き、ある警告を告げたのだ。

「ここは『絶望の都』だ。気をつけろ、今は平気でも、何か落とし穴があるぞ。

ここには、何か予期せぬものを代償として捧げなければならない技術しかないのだからな」

と。

その渡航者は言い終えると、そのまま意識を失い、数時間後には息を引き取った。

悲劇を起こした男が現れる、たった数日前のことだった。

第0話 プロローグ（後書き）

プロローグです。

以前、この辺の話を出してほしいと読者様からご要望があったので付け加えました。

これ以上グロい話にしろってのは勘弁して下さい。

残酷表現程度の話ではなく、精神崩壊者の心の中身をリアルに描くことになりますので。

それをやると、作者自身が精神崩壊を起こす危険性に触れることになります。

あれほしいこれほしいってブーメランするのはいいんですが、その小説の影響を一番強く受けるのが作者だってことを忘れないでほしいです。

第1話 転生、希白少女

『時の庭園』

フェイトは数年間ここで育った。

次元航行能力のある、巨大な邸宅と思えばいい。
中は広い。

運動会を開くことができるほどだ。

フェイトは母の使い魔リニスに、ここで魔法戦闘についての技能を教わった。

転送装置があるのは、そんな中庭の先。

母の所有物らしいが、フェイトはどういった理由で母が『時の庭園』を持っているのか、知らなかった。

まあ、知る必要も無いだろうし、今は知ろうとも思わない。

中庭を横切る時、フェイトの視界の端に、白い異物が映った。
白い床よりも白い、何か。

「？」

フェイトはそれに視線を向ける。
それは人の形をしていた。

中庭を歩いて近付くと、すぐにその正体が判明する。

「裸の女の子……？」

「フェイト、どうかしたのかい？」

「あ、アルフ、この子……」

オレンジ色の長い髪に犬耳、尻尾の女性アルフに声をかけられ、フェイトは倒れている少女を示す。

真っ白、と形容するのが最も正しいだろう。

短い髪の毛も細い手足も、白一色だ。

フェイトはまだ、色素欠乏症という病気を知らない。

それでも、何か病気を抱っているように感じられた。そのくらい弱々しく、儚げであつたのだ。

「なんとかしてやりたいところだけど、今はちよつとまずいねえ」

アルフは難しい顔をする。

そう、今はまずい。

母から、近くにある次元世界『地球』に降りて、『ジュエルシールド』という願い事の叶う石を探すように命じられているのだ。本当ならすぐにでも向かいたいところなのだが。

おそらく、この少女は次元漂流者。

何かの拍子に次元の穴が開き、その穴に落ちて生きたままどこかの世界に漂着した人間。

10年に1人か2人ほど発見されるそうだが、元の次元世界に戻ることができた例は皆無だとか。

本来は次元世界をまたにかける警察組織、時空管理局に引き渡されることになっている。

しかし、これからフェイトが行なおうとしているのは犯罪ストレスの仕事であり、一歩間違えれば捕まってしまう。そんなときに、管理局と関わりたくはなかった。

「んう」

真っ白な臉を開き、裸のまま倒れていた真っ白な少女はゆっくりと起き上がった。

「あ……！」

フェイトは少女の瞳を見て息を呑む。

隣のアルフからも、動揺したような気配が伝わってきた。

本来あるべき色が、その瞳にすらなかったのである。

不自然な、自然界にはありえない配色。

白。

真っ白。

白く、濁った瞳。

少女はのそのそと動き、地面に四つ這^ばいになって立ち上がろうとする。

しかし足が震えていて上手く力が入らないのか、ふらふらと数歩よろめいた後、顔からべちゃりと地面にキスをした。

「大丈夫？」

「あう……?」

フェイトは思わず駆け寄る。

見捨てては置けない。

やはり、母に相談するべきだろう。

しかし、フェイトの言葉を、母は聴いてくれるだろうか？

「みつどちるどらん、みつちりあ」

「えっ?」

フェイトが考え事をしていると、少女は何事かを呟き、思わず聞き返す。

突然、真っ白な少女を中心とした床に青い光の魔法陣が出現した。

三角形の頂点に円が配置されたものを2つ重ねたような、独特の魔法陣。

「、
」

歌うような旋律が謎の少女の口から漏れた。

「フェイトッ!」

不思議な音律に聴き入っていたフェイトは、アルフの声で我に返る。謎の魔法が至近距離で発動しようとしているのを見て、止めるべきが一瞬迷ったが、距離を置いて見守る方を選んだ。なぜそれを選択したのか、自分でもよくわからない。

「バルディツシュ、起きて」

“ yes , sir . ”

フェイトは万が一に備えて『魔法衣』バリアジャケットを装着する。

黒いレオタードに白いミニスカート、黒いマント。

これは魔力で編まれた衣服で、軽装に見えるが全身を防御するバリアのような性質があった。

ミッドチルダ式（以下ミッド式）の魔法使い、『魔導師』は通常、

この『魔法衣』バリアジャケットで身体を保護しながら戦う。

攻撃魔法によるバックファイアを防ぐのと、防御魔法で受け損ねた場合の最終防御ラインという、2つの意味がある。

フェイトはミッド式の魔導師であり、戦闘訓練も受けている。

彼女を教えた師は既にこの世にはいないが、自分の身を守る方法を一通りは教えてくれていた。

「ヘブシマーン
“ 翻訳開始 ”」

意味は解らないが残念な気持ちになる。

その魔法はフェイトとアルフが見ている前で、たつぷり1分かけて完成した。

攻撃用の何かを展開するでもなく、防御を行なっている様子も無く、青い魔法陣も消える。

通常、ミッド式の魔法陣は2重円の内側に正方形を2つ重ねた形である。

しかし、謎の少女のものは2重の3角形。
ということは、この真っ白な少女の使う魔法はミッド式ではないと
いう事になるが。

「あ、あー、斜め七十七度の並びで泣く鳴くいなくナナハン七台
難なく並べて長眺め、うん」

喉の調子確かめるように、何事かを呟いて頷く。
早口言葉か何かだろうか。
そんな風にも聞こえた。

「ごめんなさいさ。ミッド語は慣れてなくて、翻訳魔法を使ったださ」

腕で身体を隠しながらも、少女は警戒する2人に微笑んでみせる。

フェイトとアルフは顔を見合わせた。

特に念話も交わさず、アルフは準備していた旅行鞆を開く。

とりあえず、服を着せなければ。

「ここはミッドチルダさ？」

ピュアと名乗った真っ白な少女は、フェイトに聞いた。

「えっと……確か第97管理外世界の近くだから、違うと思う」

「管理外……？」

「魔法が認知されていない世界ってことだよ」

フェイトが説明に窮すると、いいタイミングでアルフがフェイト用の衣服を上下ひと揃え持ってくる。

ピュアはアルフに手伝ってもらいながら、上の黒いシャツを着て、同じく黒いミニスカートを穿く。

体格的にフェイトと同じくらいらしく、ブカブカだったりきつかったりという事はなかった。

ただ、靴下はあっても靴の予備がなく、同じくフェイト用のスリッパを履く。

長期の滞在は予定していない。

ピュアは礼を言っ、そのまましばらく話をする事になった。何をするにも、お互いに現状を確認しなければならない。

「次元世界はわかる？」

「うん」

ピュアは頷く。

次元を隔てた場所にある、いわゆる異世界のことだ。

異世界や宇宙、異次元などという呼び方は状況によって意味が異なるため、次元の狭間に泡のように浮かぶ各世界のことを統一して『次元世界』と呼ぶ。

この呼び方はかなり古いもので、古代に魔法文明があった世界などでは、次元世界という言葉だけが残っていたりもする。

「じゃあ、もしかして時空管理局の方を知らないってことかい？」

「ジクウ管理局？」

『なるほどね』とアルフは頷き、大まかな概要を説明した。

『時空管理局』とは、簡単に言えば次元世界を跨ぐ警察機構だ。

様々な世界から集まった人々が作った法律に基き、管理世界の間を取り持つ役目もある。

裁判所と警察が一緒になっている部分もあり、中々複雑なところもあるが、今はそこまで説明することも無いだろう。

管理世界や管理外世界というのは、要は管理局の存在を受け入れていたり、魔法を一般的なものとして認知している世界かどうかである。

管理世界は、ミッドチルダや管理局と交流がある世界。

管理外世界は、魔法が存在しない等の理由で技術的な交流が禁じられている世界。

分類としては他にも無人世界や無生物世界など色々とあるが、今はそこまで話を広げる必要も無いか。

「ここは『時の庭園』っていう、なんて言うのかな、次元航行ができる別荘みたいなものなんだ」

次元空間を移動中のため、滅多なことでは他の人間は入り込めない。それなのにピュアはここにいた。

「どうやってここに入り込んだのか、ある程度でいいから説明してほしいんだよ」

アルフは言う。

おそらくピュアは次元の穴に落ちて偶然『時の庭園』に流れ着いた

のだろうが、魔法を使えるということは意図してここに侵入した可能性もある。

それにしてもセキュリティは反応していなかったのだ。

次元の穴に落ちた人間であろうが、外から突然入り込めば防衛機構セキュリティが反応するはずなのに。

意図してやってきた場合、セキュリティを出し抜いた可能性が高く、対応も考えなければならなかった。

「辛いことまで話す必要は無いんだよ?」

フェイトは気遣わしげに声をかける。

今から法に触れるかもしれないことをやろうとしているのだが、彼女生来の優しさが厳しい追及を許さないようだ。

子供ゆえの甘さ、とも言えるが。

「わたしの胸には、何かが埋め込まれているさ。

それがある限り、わたしは死んでも別の次元世界に転生するさ」

ピュアは俯き加減に話した。

「何かって?」

「詳しいことは知らないさ。多分、人工的な魔力集積器官リンカーコアみたいなものだと思うさ」

魔力集積器官リンカーコアとは、魔導師が持つ、周囲のエネルギーを吸収して魔力に変換する臓器のようなものだ。

時空管理局の本拠地であるミッドチルダの最先端研究機関でも、それ以上の説明ができない、謎の器官である。

これは基本的に生来のものであり、魔導師としての資質に大きく関

わってくる。

ピュアの話によると、その何かを胸に埋め込んだことによって彼女の心臓はその機能を維持し続けているのだそうだ。そしてそれはピュアの心臓が止まりそうになると、高次元空間に肉体を転移させ、自動で肉体の修復を行なう。

その修復が完了した時、また通常空間へと帰還する。そうやって何度も転生を繰り返してきたのだとか。

「それって……！」

「違法研究じゃないのかい?!」

「気にしないでさ」

「気にしないでって、ピュアはそれでいいの!?!」

なんでもないような口調のピュアに、アルフとフェイトが食ってかかる。

「わたしは今まで管理局を知らなかったさ。管理局が知ってるよりも、ずっと遠くから来てるさ」

「あ……」

フェイトは気付いた。

ピュアをこんな風に改造した犯罪者は、ピュア自身にももつどこにいるかわからないのだ。

管理局のことをピュアが知らなかったということは、それだけ長い距離を隔てて転生してきたのである。

もはや探し出すことなどできない。

彼女は下手に騒いだり悩んだりするよりも、今ある現実を受け入れて強く生きようとしていた。

それにあえて異論を唱える資格は、今のフェイトやアルフには無い。
そう思ったから、黙るしかなかった。

第1話 転生、希白少女（後書き）

第一話。

ピュア嬢が『時の庭園』に転生したことによる影響について、しばらくは書いていきます。

真面目な文調の間にギャグを挿入して、暗く偏る雰囲気壊す努力はしています。

ペプシマンのCMは、最近は消えてるみたいですね。

数年TV見てなかったので、流行の変化についていくのが大変です。

第2話 少女達の事情

『殺しなさい』

『え、母さん?』

『二度は言わないわ』

一方的に念話が切られる。

ピュアについてフェイトが母プレシアに相談したところ、次元漂流者らしいと話したところでこの会話である。

「あの鬼ババア、なんてことを……!」

念話を聞いていたアルフが憤慨する。

「あんなの言うこと聞く必要なんて無いよ!」
「落ち着いてアルフ」

フェイトも、内心違和感を持っていた。

母親の娘に対するような態度ではない。

それが違和感のままで終わってしまうのが、社会を経験していない子供なのかもしれない。

同時に、はっきりと犯罪になることを指示したという事実、少なからずショックを受けている。

「オニババさんってフェイトちゃんのお母さん?」

「いや、オニババって名前じゃないって……」

フェイトに宿められたアルフがツツコミを入れる。

どうもこのピュアという少女、天然ボケの気があるようで、妙なところでズレていた。

3人は話し合う。

ピュアはこのまま殺されても、また別の世界に転生するだけだから構わないと言った。

当然だが、アルフとフェイトはそれを却下する。

とはいえ、アルフとフェイトにも何か良案があるのかというと、そうでもなかったのだが。

結局のところ、フェイトもアルフも実社会というものを知らないのである。

知識として管理局の法律などを一般常識程度に知ってはいたが、経験はほとんど無かった。

結局、これから向かう第97管理外世界『地球』へ一緒に行き、どこか現地住人に一時匿ってもらうことになった。

『ジュエルシード』の件が片付いた後、改めて時空管理局にSOSを発信しピュアを保護してもらう流れになる。

時空管理局が来るまで数日かかるだろうから、その間にフェイト達は『時の庭園』に引き籠もってしまえばいい。

それでピュアも納得し、一緒に地球へと降り立つことになった。

地球の文明レベルはそこそこ高い。

魔法の領域には達していないものの、一部では魔法技術でも作成が難しいものの製造技術が確立していた。

その点からも、準管理世界に名を連ねる日も遠くないとされている。とはいえ、それは結局一部での話だ。

まだまだ技術は普及していないし、半分程度の領域では未だに原始時代さながらの生活が行なわれていた。

「へー、電子レンジって言うさ？」

「中で出るのはマイクロ波みたいだね。

遮蔽^{シールド}が甘くて外に漏れてるから、動いてる間はあんまり近付いちゃダメだよ」

「うん」

アルフがフェイトとピュアに説明する。

覚えるのは面倒だったが、この辺の知識を教わっておいてよかったとアルフは思った。

ついでに、この手の調理器具や対応した保存食品が開発されていて良かった。

3人とも、まともな料理などできないからだ。

もっともそれは単なる知識不足によるものだったが。

上記の通り、しばらくは冷凍食品を解凍して並べるだけの食事になりそうだった。

フェイトとアルフが地球に来た理由である『ジュエルシード』探しについて、急がなければならなかったという理由もある。

それについてピュアは何を思ったか、協力を申し出た。

最初に、マンションの屋上でアルフが広域探索魔法を使った後のことだった。

1回目では探索魔法に引っかけからなかったのだが、なぜかピュアが屋上に上ってきて、言ったのだ。

「広域探査だけでも協力したいさ」

と。

「でも、これからアタシ達がやろうとしてるのは、犯罪スレスレのことなんだよ？」

「黙ってればバレないさ」

悪びれることなく、とんでもないことを言い出す。

確かにピュアはデバイスを持っていないため、履歴に記録されることはない。

フェイトとアルフが黙っていれば、時空管理局も調べようがないだろう。

フェイトにもアルフにもその考えを覆すことはできず、結局ピュアの主張は通ってしまった。

ただし、時空管理局が出てきたら手を引くこと、と条件はつけたが。

巨大な3角形を重ねた魔法陣が展開される。

「
、
」

朗々たる詠唱はまるで歌っているようにも聞こえた。

一歩二歩と、魔法陣の中をゆっくり、円を描くように歩く姿は、神に祈りを捧げる巫女のようにもあった。

ピュアが扱う魔法はミッド式にはない、神聖な雰囲気があるように思う。

何より、長い。

もう10分はこうして詠唱を続けている。

ミッド式の儀式魔法でも、ここまで長いものはそうそう無かった。少なくともフェイトは知らない。

もちろん、今フェイトが使えるような高速戦闘用の魔法でも、デバイスの補助があるからこそものの数秒で発動できるというだけで、デバイス無しではそれなりの時間がかかってしまうものもある。それにしだって、長いものでも精々5、6分といったところだが。

詠唱が完成する。

「エエイマムム 広域探索開始」

なぜか、不安な気持ちになる。

ミッド式のように、『サーチャー』と呼ばれる小型の視覚情報端末を飛ばすものではない。

特にピュアの周囲に何かが起きるというわけでもない。

フェイトとアルフが揃って首を傾げると、目を閉じていたピュアが何か呟く。

「ええと……あ、発動したさ……!？」

「え　　！？」

フェイトとアルフは驚き、一瞬遅れて『ジュエルシールド』特有の魔力波を感知した。

「近くに別の……魔法使いの人が2人いるさ」

「うん、急がないと……！」

フェイトとアルフはすぐに反応があった場所に急行する。

ピュアは、フェイトとアルフを見送った後、フラフラとおぼつかない足取りで部屋に戻った。

嘔吐感に耐えながら、部屋につく頃には這っていたようにも思うが、よく覚えていない。

トイレで嘔吐し、昼に食べたものをほぼすべて吐き出した後、洗面所で口を洗う。

そうすると、幾らかすつきりする。

もう何度も死んだり転生したりを繰り返してきたが、この感覚にだけは慣れることができない。

探査、検索系魔法を使ったときに蘇る、他人の今際の^{いまわ}絶望。

フェイトと、アルフの感情の動きを思い出す。

フェイトは素直でまっすぐで、優しい。

母親について何か大きな悩みがあるようで、それが『ジュエルシード』というものを探す理由にもなっている。

しかし、今は何か揺れていた。

それはピュアのことを母親に報告した念話の前後からだ。

アルフが強い警戒から突然激しい怒りに転じたことにも、酷い命令以外に何か理由があるのかもしれない。

だからまあ、ピュアもその場では強く聞けなかったのだが。

なぜピュアにこんなことがわかるのかというと、ピュアには『情動感応』という特殊能力^{レアスキル}があるからである。

それは思考をすべて覗き見るようなものではないが、接近した人間や動物がどのような感情を抱いているかがわかってしまうものだった。

昔、この能力のせいで酷い目に遭い、今もその後遺症が残っている。それが先に述べた、探査系魔法を使用したときに蘇る他人の絶望だ。

それはともかく。

フェイトがピュアのことを母親に相談する時、アルフはフェイトの母親に強い警戒心を抱いていたのである。

アルフとフェイトの関係は性質から考えれば『使い魔契約』のそれだろう。

ということは、アルフがフェイトを心配するのは、純粹に使い魔が契約主を護る行動ということになる。

その相手は、本来心の安らぎとなるべき母親^敵。

ということとは、何か母親の方に異常がある。

それをフェイトは認識し、なんでも願いを叶えるという『ジュエルシード』に頼ることで、正常に戻そうとしている。

今、得られる情報から考えれば、こんなところか。

予想されるのは母親による虐待。

それもおそらく、暴力を伴ったもの。

実際に見たわけではないが、フェイトのシャツの下には見るも無残なアザがいくつもあることだろう。

それに加えて、念話の所要時間が問題だ。

娘にかけるべきではない言葉を母親が吐いたのだとしても、短すぎる。

断言してしまうには情報がやや足りないが、フェイトが考えているよりももっと、事態は悪い方向に向かっているのではないだろうか。一度、フェイトの母親に直に会^{じか}ってみる必要があると思った。

ピュアは目覚めた。

少し眠ってしまったてらしい。

トイレで吐いて、口の中を洗面所で洗った後、リビングのところで床に突っ伏していた。

まずい。

フェイトとアルフが戻ってくる。

少なくとも、ベッドに入っていなければ。

だるい身体を動かし、床を這って寝室に向かう。

ようやくベッドに潜り込んだところで、マンションのドアが開いた。これならまだ、誤魔化しも利く。

体力的な問題と、誤魔化せる。

そう思つて安心すると、気が抜けたのか、意識が一気に闇の中へ落ちていった。

「『ジュエルシード』も早々に2つ確保できたし、幸先がいいねえ」
「うん。ピュアにお礼を言わないと……」

フェイトはアルフの言葉に頷いて呟く。

『ジュエルシード』が落ちていたのは、豪邸の敷地にある森の中だった。

どうやら発動したといつても暴走したわけではなかったようで、猫が1匹巨大化した程度であつた。

先に来ていた魔導師の少女と戦うことになったが、どうやら魔法を覚えてから間もない素人だったらしく、結局フェイトが勝利を収め、『ジュエルシード』を1つ、入手していた。

ピュアの広域探查魔法は、『ジュエルシード』の反応はおろか、付近にいる魔導師のことまで捉えていた。

しかし、使い魔と魔導師の区別がつかないのか、現場にいたのは白い魔法衣の少女と1匹のフェレット。

それでも、急いでいなければ先に『ジュエルシールド』を確保されていた可能性はある。

そう考えると、ピュアが使った広域探査魔法はかなり精度が高いのかもしれない。

マンションに戻るとピュアはベッドで眠っていた。

あれだけ高性能な広域探査を行なったのだ、かなり疲労が溜まっていたのだろう。

ミッド式のものでさえ、身体にかかる負担は大きいのだ。

フェイトはそう考えると自然と微笑みが零れた。

あどけない寝顔。

構わず一緒のベッドに潜り込み、自分より幾らか華奢な身体を抱き寄せて呟く。

「おつかれさま」

第2話 少女達の事情（後書き）

第二話でした。

リメイク前では『隠蔽された苦痛』の部分ですね。

リメイク前の感想に、二次創作なんだから原作部分も入れてほしいって要望があつたのですが。

やってみるとやつつけ感満載の見苦しい文章になったので、見苦しい部分を削除して、代わりに前後の描写を入れました。

『ええいままよ』のネタは作者的には『ブラックジャック』から持ってきました。

ブラックジャックが「ええいままよ」とか「南無三」とか言って助かった人って、ほんとどいません。

それくらい無茶な状況だったんでしょう。

広域探査魔法でこんなことを口走る人はあんまり信用したくないですよね。ね？

第3話 寝言

ピュアの広域探査魔法の精度は、ミッド式のそれを遥かに凌いでいた。

探査距離、誤差、精度、そして、肉体にかかる負担までも。

最初に『ジュエルシード』を入手してから6日が過ぎた。

1つは近くの湖の畔。ほとり

1つは海の中。

1つは少し離れた森の中。

1つは温泉宿の近くの川の中。

このとき、フェイトは白い魔法衣バリアジャケットの少女と鉢合わせした。

もともと、ピュアに伝えられていたため、驚きはしなかったのだが、それから『ジュエルシード』を賭けての魔法戦を行い、これに勝利、もう1つ。

1日に一度、ピュアの体調を見ながらで休ませた日もあったとはいえ、それに見合う、いや、それ以上と言える成果が出ていた。ともかく、これで6つ『ジュエルシード』を確保できた。

ただ、なのは、という白い魔法衣の少女の言葉に、フェイトは心が揺れるのを自覚していた。

自分達がやっていることは、犯罪スレスレの行為だと自覚しているがゆえに。

ただまっすぐに、純粹に、歳相応の子供らしく、そのひと言ひと言がフェイトの心に入り込むのだ。

事情を話して、協力してくれるというのなら、こつやって奪い合うのではなく、共闘できたなら。

しかしそれは、母は受け入れない。
聞いてしまった。

はつきりと、『侵入者を殺せ』と。
ならば、共闘したことが知られば、必ず裏切り奪い取れと命じられるに違いない。
それはできない。

このまま、ピュアは厚意の協力者、なのはは敵対する魔導師。
それでいい。
それでいいはずなのに。

『あなたとお話したいの！』

まっすぐな瞳で、純粹な気持ちを、歳相応の子供らしい言葉に載せて、送ってくる。
心の防壁を越えて、浸透してくる。

応えたい。
心がざわめく。

「フエイトちゃん、大丈夫？」
目覚める。

そこにあつたのは、心配そうに覗き込むピュアの色彩のない真っ白な顔。

詳しくは聞いていないが、瞳は濁っているものの、魔法か何かで視覚を代用しているようだ。

思わず、寝間着に包まれたその華奢な体軀を抱き寄せる。

「ひゃっ!？」

ピュアは少し抵抗の意思を見せるが、力を込めるとすぐに大人しくなった。

「いつ、たい……!」

さらに力を込める。

温かくて柔らかい。

荒んだ心が癒されていくようだ。

「その、ごめんなさい……」

フェイトは平伏する。

あんまりに心地良いので、寝惚けていたこともあり、そのまま思い切り抱き締めてしまったのだ。

しばらくもぞもぞと蠢いていたピュアが、ぐったりと動かなくなつたのである。

数分後、朝食に起こしに来たアルフが気付いたので事なきを得たが、

ピュアはしばらく怯えていた。

まさか子供の細腕で死に掛けるとは思わなかった。
一度、アルフとは念話でピュアの戦闘力について話したことがあったが、どうやら無駄だったようだ。

寝惚けたフェイトに抵抗できない程度の体力となると、どんな戦闘技術があつたとしてもほぼ台無しである。

下手をすると幼稚園児より弱いのではなからうか。

朝のこともあり、ピュアの体調が思わしくないので、フェイトとアルフが『ジュエルシード』探しに出かける。

最近ピュアのサポートもあり、フェイトの体調も決して悪くはなかった。

ということ、多少の無茶も利く。

広域探索魔法で大雑把な位置を掴み、広域への魔力放射で『ジュエルシード』を強制発動させるのだ。

この方法は、広域探索だけでは位置を特定できそうにない場合に使うおうと思っていた。

ピュアが次々と『ジュエルシード』を発見したため機会がなかったのだが、フェイトの体力に余裕もある今なら使うべきだろう。

魔力放射とは、様々な使われ方をする。

原理で言えば、『リンカーコア』で周囲の魔力素から変換された使用に適した魔力を散布し、射砲撃の威力減衰を防いだり、魔力を術式に結合させる補助とするのが一般的だ。

今回は、『ジュエルシード』に射撃魔法を直撃させた状態を擬似的に再現し、半ば暴走に近い形で発動させる。

『ジュエルシード』は、発動さえしていれば発見も封印も容易だ。当然、魔力の放出は肉体に負荷をかけるため、広域への放射はまだ未熟なフェイトの身体には大きな負担となる。

アルフが封時結界を展開し、フェイトが魔力放射を行なう。

封時結界とは、術者が設定した条件に合う者を現実世界と重なった、現実世界には影響の出ない位相の違う亜空間を展開する魔法だ。術者の定めた条件と言っても、『リンカーコア』の有無など、大雑把な括りでしか選べないのは難点かもしれない。とにかく、この魔法を使用すると、現実世界から亜空間へ、条件に合ったものつまり今回の場合は『魔力を持ったもの』が送り込まれる。

『リンカーコア』を持つ者にならそれは視覚として見えるので、近くにいればすぐに気付くことができるのだが。

フェイトは半ば、なのはと名乗った白い魔法衣の少女が来ることを望んでいた。

「気付かれたみたいだよ」

「うん。『ジュエルシード』は見つけた。行くよ、アルフ」
「ああ！」

ビルが面する大通りの隅に、『ジュエルシード』は落ちていた。

「ジュエルシード、？10、封印」
“sealing”

金色と桃色の光が二重に『ジュエルシールド』を封印する。

黒い魔法衣のフェイトと、バリアジャケット白い魔法衣のなのはが対峙した。

これで3度目の戦い。

なのはの構えや拳動から、相当な訓練を積んできたことが窺い知れた。うかが

物凄い勢いで成長している。

今度は、油断できない。

ソファで休んでいたピュアは、はつきりとその声を聞いた。

『自分の暮らしている街や、自分の周りの人たちに危険が降りかかるのは嫌だから。これが、私の理由！！』

子供らしいといえば子供らしい、清々しいまでに理屈をかなぐり捨てた感情の発露。

これは口に出して叫んでいるな、とピュアは思う。

文脈的にもそうだし、状況的にも話に聞いていた白い魔法衣の少女らしい叫びだ。バリアジャケット

そこに浅い怒りはあるが、憎しみや恨み、不安といった負の感情はない。

勝敗すらも、今の彼女は置き去りにしていた。

ピュアが持つ『情動感応』は、外に向いた強い感情なら、離れていても心の声まで聞こえることがある。

不意に。

フェイトの心が大きく揺れた。

それを感じ取ったアルフが何事かを叫び、ある程度安定させる。

強い感情だから離れていても感じ取れたが、何を言ったのかまではピュアには聞こえなかった。

しかし、フェイトの精神は以前よりもさらに不安定だ。

今にも泣き出しそうで、それでも自分の目的のために、立ち止まることを許さない。

立ち止まる自分を赦さない。

「フェイトちゃん……」

最早、一刻の猶予もない。

このまま放置すればフェイトの心は壊れてしまう。

念話で、どうやって呼び戻す？

『『ジュエルシード』を諦める』などと言って、彼女が受け入れるだろうか。

ピュアがソファから身を起こして思索していると、大きな魔力の爆発のようなものを感じ取った。

この現象はよく覚えて^{感じ}いる。

『ジュエルシード』の暴走だ。

しかも、今までの暴走よりも放射されているエネルギーが遥かに大きい。

空間が裂け始めるレベルだ。

このまま暴走し続けられ、いずれこの世界を飲み込んでしまう。

ピュアは慌てるが、どうしようもない。

彼女は飛行魔法が使えないのだ。

今から徒歩で向かって、間に合うとは到底思えなかった。
アルフかフェイトに念話で迎えに来てもらうしかない。

ピュアは『情動感応』というレアスキルを持っている関係上、自分の感情操作には慣れている。

だから、ピュアなら『ジュエルシールド』に願って、事象をある程度コントロールすることはできそうだった。

しかし念話を送る時になって、フェイトの強い感情がそれを遮った。

『鎮まれ……鎮まれ……！』

先程まで壊れそうに不安定だったとは思えない、強く願う感情。

余計な雑念が除外、最適化されていき、ただ一筋に向かう。

その中心にあったのは、白い魔法衣バリアジャケットの少女への義務感だった。

何事もなく終わったかもしれない、白い魔法衣バリアジャケットの少女の『ジュエルシールド』探し。

自分の周囲の平和を守ろうとする行為を邪魔しているのは、間違はなく自分達なのだから。

自分達の勝手な都合で、『ジュエルシールド』を横取りしようとしている。

ならばせめてもの義務として、この世界を、あの少女が守ろうとしているものを傷つけてはならない。

果たして。

『ジュエルシールド』の暴走は止まった。

同時に、フェイトの意識が途切れる。

10分後。

「 、 ” 」

アルフはピュアに疑念を持った。

この真つ白な容姿の少女は、意識を失ったフェイトを抱えたアルフが帰ってきた時には、既に詠唱を始めていたのだ。念話で連絡したわけでもないのに。

それからもたつぷり5分かけて、スベルキャスト呪文詠唱は終わる。

「キレテナーイ “ 回復結界展開 ” 」

この残念な気持ちになる詠唱は一体、何なのだろうか。
青い魔法陣と共に直径2mほどの小さな結界が展開される。

威力は凄まじいのひと言だった。

広域魔力放射、戦闘、『ジュエルシールド』の捨て身の抑え込みという、蓄積した疲労からすれば半日眠っていてもおかしくなかったフェイトが、3分ほどで目を覚ましたのだ。

慌てて確認すると、『ジュエルシールド』を素手で抑え込んだときの傷が塞がりかけていた。

「『リンカーコア』に魔力を満たして、肉体の自然治癒力を活性化させたさ」

ピュアの故郷の魔法には、こんな、間接的な治癒魔法しかないのだという。

その関係上、どうしても外科手術的なミッド式には劣る部分がある。それにしたところで、ここまでの効果を発揮できる治癒魔法を使える者がどれだけいるだろうか。

不思議なのは、これだけの魔法を使ったにもかかわらず、ピュアの体調がそれほど悪化したようには見えないことだ。広域探查魔法と一体何が違うのだろうか。

翌日、フェイトはベッドで目を覚ます。少し寝過ぎている気がした。

それもそのはず、1日でかなり無茶をした彼女は、大事を取ってその日は無理矢理ベッドに寝かしつけられたのだ。

ピュアの魔法のおかげで怪我もほとんど治り、体調もかなり回復していたのだが。

しかし、それを確認したピュアが、ベッドから出ることを許さなかった。

『この魔法は体の疲労を取るさ。でも、心の傷を癒すことはできないさ』

そのひと言に、何も言い返せなくなった。体調は良くても、なのは言葉に色々と考えてしまって、自分がすべきことを見失いかけていたのは事実だ。

気持ちを整理する時間は必要だったかもしれない。

「ん、ふぁ……」

伸びをして横を向くと、色彩のない真っ白な少女のあどけない寝顔があった。

朝、と言うには少し早い時間に目覚めてしまったようだ。

「んう……おか……さ……」

ピュアは夢を見ているらしい。

母親が恋しいのだろう。

この辺りはまだまだ子供だ。

フェイトは寝間着姿のピュアを優しく抱き締めた。

当然、白い唇が無意識に紡ぎ出す言葉を、間近で聴いてしまう。

ピュアが無意識に維持している翻訳魔法が、

無情にも、

その言葉を、

正確に、

フェイトに、

伝えた。

「おかあさん……おねがい……わたしを……ころして」

第3話 寝言（後書き）

第三話でした。

原作で次元震が発生する回です。

ピュアはある事情から、転生してすぐは幼稚園児に負ける程度の腕力しかありません。

ある意味超人なフェイトが寝惚けて思い切り抱きしめると、体がミシミシ言い出します。

なんて羨ま……ゲフンゲフン

キレテナーイの元ネタは、皆さんご存知、ヒゲソリのCMです。

あれも最近見なくなっただんですが、消えてしまったんでしょうか？

第4話 たすけたい

それが夢だと気付いたのは、鏡を見たときだった。

滲み、揺らぎ、ぼやけた視界の中、辛うじて自分の動きだとわかるもの、つまり姿見の大きな鏡を見つけた。

その中の自分の姿に違和感を覚える。

とはいえ、視界が不鮮明な状態では、大雑把なところしかわからない。

それでも、近付けば髪の毛が白か黒か、という程度のことは識別できる。

幸せだった頃の夢。

魔法による擬似視力が上手く調整できなかった頃ということは、おそらく改造手術を受けて間もない時期だ。

最初は口頭で、母から様々な故郷の逸話など、御伽噺にも近い話を教わった。

故郷の魔法の使い方を教わったのもその時期だ。

ずっと母に甘えていたように思う。

しかし、その母はもういない。

生きているのか、死んでいるのか、最早時間の感覚もなくなっている。

あれからどのくらいの時間が過ぎたのかも、自分にはわからなくなっていた。

そして、自分には、逢う資格も無い。

言うてはいけないことを言うてしまったから。
自分で幸せな時間を放棄してしまったから。
苦しみに耐えかねて。

母に酷いことを懇願してしまったから。

「お母さん、お願い、わたしを、殺して」

と。

朝。

結局、フェイトは何も言わなかった。

おそらく、ピュアも触れてほしくないだろうと、そう思ったから。

「今日は経過報告でね、一度『時の庭園』に戻るんだよ」

朝食後、アルフが話す。

そういえばそんな話だったなとフェイトは思い出した。

もう地球に降りてから2週間が経つ。

そろそろ一度母に会って、協力してくれているピュアのことも含めた現在の状況を話さなければならぬ。

「わたしも、フェイトちゃんのお母さんに話したいことがあるさ」

「え？」

真っ白な少女ピュアの言葉に、フェイトは戸惑う。

今の母が本来部外者であるピュアの言葉になど、耳を貸すだろうか？
問答無用で殺されてもおかしくない。

「わたしは、『アルハザード』に行ったことがあるさ」

顔は笑っていたように思う。

しかし、目は決して笑っていなかった。

声も少し震えていたように思う。

隠そうとして、隠し切れない、複雑な感情。

「だから、ある程度『アルハザード』の技術も知ってるさ」

「でも、問答無用で殺されるかもしれないんだよ……？」

「大丈夫、わたしは死なないさ」

それ以上はフェイトもアルフも強くは言えず、結局ピュアは意見を押し通してしまう。

なぜそんなことを言い出したのか、ついに聞きだすことはできなかったが。

「そんなもの嘘に決まっているでしょう？」

フェイトの母、長い黒髪の女性プレシアは断じる。

はっきり言ってしまうと、本当か嘘かなどどうでもよかった。
ピュアという少女が、会いたいと。

それだけの理由で貴重な自分の時間を奪うのが、許せなかっただけだ。

だから、これからこの人形にお仕置きをしようと思う。
ごく自然な流れだ。今のプレシアにとっては。

だから、深くも考えずピュアという少女の言葉を嘘と決めてかかった。

そのとき、声が割り込む。

「なら、殺してみればいいさ。わたしが言ったとおりに死体が消えれば、わたしの言葉は証明できるさ」

「ピュア!？」

フェイトが悲鳴のような声を上げる。

部屋に外で待っているはずなのに、ピュアは勝手に入ってきたのである。

アルフはピュアの後ろに控えていた。

彼女は、ピュアにフェイトの現状を打開するための光明を見出し、
自ら扉を開いたのである。

このままでは何も状況が変わらないと知り、せめてフェイトが暴力を振るわれる前に、と。

「覚悟はできているようね」

死刑宣告をするプレシアに、ピュアは堂々とはっきり言った。

「覚悟も何も、わたしはもう、助からないさ」

「何が目的？」

「終わった物語の主人公から、まだ続いてる物語の主人公への、ただの伝言さ」
悲劇

ピュアはアルフに言ってフェイトを下がらせる。

フェイトは不安そうにしていたが、『大丈夫さ』と断言して押し切った。

「先に言っておくけれど、法に外れているからという意見は聞かないわよ」

「わたしの話をするだけさ」

宣言通り、ピュアは自分の『アルハザード』における体験を話す。

まず、ピュアは一度死んでいる。

彼女の母親はそんな娘を蘇らせるべく、『アルハザード』を求め、辿り着いた。

そこで見事娘は蘇るのだが、約半年後、娘はその願いを受けた母親に殺された。

「……意味が解らないわ。どうして蘇った娘を殺す必要があるの？」
「それが『絶望の都アルハザード』の嫌らしいところさ」

今、こうやってまともに話ができるのは、奇跡以外の何ものでもない。

ピュアがフェイトとアルフに聞かれるのを避けた理由の1つがここにあった。

ピュアに『リンカーコア』のような性質を持った魔法具を埋め込んだのは、ピュアの母親なのである。

それによってピュアは、『エモーションナル・レセプション情動感応』というレアスキルに目覚めた。

これが1つ目にして最大の奇跡である。

このとき目覚めた能力が単純な『電撃』だったなら、自分が発した電流でピュアの肉体は焼き尽くされ、一瞬の内にミネラルの柱となっていただろう。

あるいは『瞬間移動』だったなら、細胞一つ一つをバラバラに移動させてしまい、細切れになっていたかもしれない。

とはいえ、それでも『情動感応』は最初、容赦なくピュアに牙を剥いた。

近くに『アルハザード』技術の犠牲になり、絶望の内に死に行くだけの人々がいたために、その感情をダイレクトに受け取ってしまったのだ。

無理矢理『情動感応』に目覚めさせられたようなもので、それを制御したり、流れ込んでくる感情を受け止めるだけの精神力を、ピュア自身は持ち合わせていなかったのである。

当然、ただでは済まない。

負の感情に押し潰され、日に日に弱っていく娘を見かねて、母親はもう1つ『アルハザード』製の技術に手を出した。

強力な封印に使用できる魔法具を、娘の身体に埋め込んだのだ。

2つ目の奇跡は、それが何もしなければ無害な類の魔法具だったことである。

封印維持によって強い負担が発生するタイプだった場合、死までの時間が20秒ほどという魔法具があるのだ。

もちろん、丁寧に使い方を解説したデータベースなど存在しない。

この2つの奇跡を乗り越えて、半年は幸せに暮らした。

ただこれも、2人に『アルハザード』を出る理由がなかったためだ。

当然、『アルハザード』には力を求めてやってくる者もあり、そういった人間は脱出する手段を探す。

『アルハザード』にいる限りそういった人間の目を逃れることは不可能であった。

なぜならば、5ほどの摩^{ビル}天楼と無人の民家のような家が10ほどある以外は、一面砂漠だったからである。

ピュアと母親はそういった人間に捕まり、脱出する手段の搜索を手伝わされた。

だが、ついに脱出法は見つからなかった。

ただし、『アルハザード』に居ながら、標的を暗殺する手段なら存在した。

それが、ピュアの『情動感応』を封じるために埋め込まれた、『アルハザード』製の魔法具だったのである。

それはピュアの『情動感応』と組み合わせることで、ピンポイントの遠隔爆撃を可能とするものとなった。

つまり、標^{ターゲット}的の死の瞬間まで、ピュアの『情動感応』は標^{ターゲット}的と繋がっているのだ。

死の絶望や苦痛は容赦なくピュアの精神を刻んだ。

それを思い出そうとすると、今でも体調を崩すほどに苦しんだ。

ピュア自身、それ以降のことはよく覚えていないが、1ヶ月以上は

ベッドに縛り付けられていたようだ。

なんとかかまとも意識が戻った頃には、
身体はガリガリに痩せ細り。

寝汗で寝間着やベッドはベトベト。

髪の毛は白を通り越してほぼすべて抜け落ちていた。

そして。

看病に疲れてやつれた母を見て、ピュアは。
懇願した。

『お母さん、お願い、わたしを、殺して』
と。

「もし、プレシアさんがそんなお願いされたら。
ちゃんと生き返らないように。
転生しないように。

殺してあげてほしいさ」

「！」

プレシアは口を開き、そして閉じる。
喉まで出かかった言葉を飲み込む。

『できるわけがないじゃない。
娘を殺すなんて』
プレシア

ピュアの母親もそうだったに違いない。
そしてそんな自分を想像できなかったから、この悲劇は生まれたの

だ。

ありえない容姿を持つ少女。
すべての色彩を失った少女。

本来の髪の色、瞳の色、肌の色は何色だったのだろう。

想像しかけて、その姿が娘と重なった。
アリシア

「っ　　！　　」

ぞわり、と背筋に悪寒が走る。

一歩二歩と、後ろに下がる。

認めたくない、あつてほしくない想像が脳裏を過ぎった。

ピュアの言葉を思い出す。

今のピュアでさえ、幾つかの大きな奇跡の産物なのだ。

目の前で爆発四散するかもしれない。

苦しんだ拳句に発狂して死ぬかもしれない。

もっと悪くすれば、プレシアが自分の手で殺すことになるかもしれない。

いや　　。

そう、例えば。

永遠に苦しみ続ける　　。

殺せなくなる　　。

かもしれない。

ピュアのように。

ぐらりと。
視界が。
傾^{かし}いだ。

「ピュア、大丈夫かな……」

金髪の少女フェイトは、オレンジ色の長い髪の女性アルフの胸に頭を埋めながら呟く。
しばらく前にピュアと暮らし始めてから、フェイトは不安なとき、こつやって誰かに抱きつくようになった。

マンションを借りているとはいえそれは1人用の部屋で、アルフはリビングのソファで寝るつもりだった。

そこにピュアが転がり込んできたようなものである。

事情を聞きフェイトが1人寝かせるわけにはいかないと、言い出した。

それからピュアとフェイトは、1つしかない大きめのベッドで一緒に寝るようになったのだ。

初日はフェイトが寝惚けてピュアを絞め殺しかけたりしたアクシデントもあったが、よほど心地良かったらしい。

不安があるとアルフかピュアに抱きつくようになったのは、それからである。

「ごめんよ、フェイト」

アルフは謝る。

今回ばかりはフェイトの気持ちもよくわかった。

今、戦闘力が皆無なその少女は、フェイトの母親プレシアと対峙している。

何かあれば念話で伝えるように言っているが、アルフが最も危険視している人物と密室で2人きりなのだ。

逆鱗に触れればいきなり殺されてもおかしくない。

アルフがフェイトを連れて部屋を出たのは、ピュアの名状し難い迫力に気圧されたことだった。

あるいは虐待を受けているフェイトを救ってくれるのではないかと、思ってしまったのである。

今からでも部屋に戻り、2人の話に立ち会うべきかもしれない。

しかし、部屋に入る前、ピュアが言ったところによると、プレシアの意識がフェイトに向いていては、まともな話し合いにならないそうだ。

そうかもしれないと思う。

使い魔であるアルフには狼だった頃の記憶が少し残っている。

それによれば、やはりプレシアのフェイトに対する接し方は、常軌を逸していた。

無理矢理に難癖をつけ、虐待に持ち込んでいる節すら感じられたのだ。

止めに入るアルフが近くにいれば、それすらも理由に振るう暴力を酷くした。

しばらく、アルフとフェイトは互いの不安を打ち消すように、座ったままじつと抱き合っていた。

『アルフさん、フェイトちゃん、プレシアさんが……！』

切迫した感情の乗った念話が届いた瞬間、2人はどちらからともなく身体を放し、部屋の扉を開けて中に踏み込んだ。

「ピュア……！？」

「無事かい　え！？」

戦闘の心構えを持って立ち入った2人は、その光景に意表を衝かれた。

“　、　”

真っ白な短い髪の毛、白い肌、白く濁った瞳の少女ピュアは、魔法陣を展開して呪文詠唱を行なっている。

その傍に居るのは、黒いウェーブのかかった長い髪的女性プレシア。

プレシアは地面に倒れ伏していた。

激しく咳き込み、大量の血を吐いている。

一刻を争う状況なのだと理解した。

「母さん！？」

「……くっ！」

母親の下に駆け出してしまったフェイトに、アルフは背を向けて部屋を出て、治療装置を探しに走る。

確か、近くの部屋にプレシア特製の医療用装置があったはずだ。わけが解らないが、フェイトのためには、とにかく助けなければ。

プレシアは一命を取り留めた。

ピュアが無理をして強力な回復魔法を使い続けた御蔭である。

『時の庭園』の検査装置とデータベースで調べた結果、ある一つの病名が浮かび上がった。

『リンカーコア集積器官変異症』。

魔力集積器官に発生する腫瘍、『癌』である。

魔法の使用そのものには影響が出ないため、自覚症状がほとんど出ない難病だった。

症状はじわじわと増していく肉体への負荷。

それによって免疫力が低下し、他の様々な病気にかかりやすくなる。

今回の吐血はこの免疫低下によって併発した別の病気『日和見症候群』が原因であった。

『日和見症候群』とは、免疫力の低下によって普通は感染しないウイルスに感染したりする病気の総称である。

併発した病気はピュアの回復魔法と、プレシア特製らしき治癒装置の御蔭で快復しているが、『リンカーコア』の変異はその治癒装置では治せないようだ。

ピュアの強力な回復魔法でも、魔力集積器官リンカーコアそのものの変質まではどうにもならない。

ただし、ピュアの回復魔法は体力を回復させるため、それに伴い免疫力が回復しつつあり、すぐにどうこうという状況ではなくなっている。

根本的に治療する方法は、一応存在するようだ。

ただそれには、『リンカーコア』の魔力を直接操作することが可能な、専用の特殊な装置が必要となる。

だが、滅多に発症しない病気であるため、ミッドチルダに試作品が1基しか存在していない。

『ジュエルシード』探しは、しばらく中止になった。

それどころではなくなってしまったのだから、当然だろう。

フェイトは母の寝室に入り浸り、眠り続ける母の手をずっと握っていた。

また、ピュアも丸1日眠り続けた。

病気の応急処置のために、かなり無理をしたのである。

目覚めたピュアに食事を勧めながら、アルフは聞いた。

「一体、何があったんだい？」

プレシアは病気のことなど、アルフやフェイトには一切悟らせなかった。

それだけの精神力と執念を持っていたのだろう。
それがここへ来て、一気に悪化したように見えたのだ。

容態急変の原因はおそらく、精神的なもの。

ピュアがプレシアに話した内容に、自分の考えを覆す何かがあったに違いない。

アルフはそう思った。

例えば、プレシアが『ジュエルシード』集めを命じた、アルフも知らないような目的を諦めさせた、とか。

気を張って、病身を押してやり遂げようとしていたのだ。

妄執とも言えるその心を、ピュアの話が砕いてしまったような、そんな気がする。

「わたしの、身の上話をしただけさ」

「そうかい」

アルフは追求しなかった。

誤魔化しなのはわかっていたが、真実を知る必要があるとも思われないし、特別知りたいとも思わない。

最初から、言葉を濁すようなら話は打ち切るつもりだった。

第4話 たすけたい（後書き）

第四話でした。

原作ではプレシアによるフェイト虐待シーンが入るところです。

この話ではアルフがピュアを生贄にフェイトを救い出していますが、勘弁してあげてください。

ピュア自身もそれを望んでいましたし、アルフは主であるフェイトが最優先なので。

ピュアがプレシアに口を出した理由はまた別にありますが、この第四話ではあえて説明していません。

第5話 アースラ

茶髪ツインテールに白い魔法衣バリアジャケットの少女、高町なのはは疑問を感じていた。

夜の臨海公園で『ジュエルシールド』を取り込んだ植物が暴れ出したのを、得意の砲撃魔法で仕留め、『ジュエルシールド』の封印を完了した。

しかし、フェイトという、金髪の少女は姿を現さない。

あれほど『ジュエルシールド』に執着していたのに、姿を現さない。

「何かあったのかな……？」

「奪い合いにならなくなっただのはいいいことだけど……」

薄茶色の小動物フレットのユーノも、何か釈然としないものを感じているようだ。

「少し、話を聞きたいんだが、いいか？」

「！」

なのはは驚いて声をかけてきた少年の方に振り向く。

全身を覆う黒い魔法衣バリアジャケットを身に纏った、なのはよりも幾分年上に見える少年だった。

思わず身構える。

「君はだれ？」

「僕は時空管理局執務官、クロノ・ハラウオンだ」

「時空管理局！」

ユーノは驚いた。

なぜなら、今の『ジュエルシード』探しのきっかけである輸送船の事故で、次元世界の警察機構である管理局が動くのは、もう少し先だろうと思っていたからだ。

ユーノ自身は事故後、直接この地球へ来たため、管理局で何があったのかは知らない。

「あ、私は高町なのはです」

「僕はユーノ・スクライアです」

「ああ、スクライア一族の人間か」

「先日の事故でこの世界に落ちた『ロストロギア』、『ジュエルシード』を集めています。」

彼女は現地の協力者です」

「なるほど、観測した次元震はそれか」

クロノは目的を聞いて納得した。

同時にユーノもなんとなく察する。

おそらく、偶然付近を航行していた次元航行艦が次元震を観測したために、急遽原因を調べに来たのだ。
それならこの対応の早さも納得できる。

「済まないが『アースラ』で詳しく事情を聞きたい。次元震が起こった以上、民間人だけに任せるには危険だ」
「……はい」

仕方ない、とユーノは思った。

既に、事態は自分の手で收拾できるレベルを超えてしまった。

「ユーノ君、次元震ってなんなの？」

「説明していなかったのか、君は」

「いや、説明したじゃないか。この前のフェイトとの戦いで『ジュエルシード』が暴走した、あれだよ」

「次元震っていう呼び方は聞いてないの」

そういえばそうだったか、とユーノは思い返した。

「こんなところで立ち話もなんだ、一度『アースラ』へ来てくれ」
「あ、はい」

ユーノとなのはは従う。

『次元震』とは。

ある一定以上のエネルギーの集中で、空間が崩壊し始める現象である。

一定以上といってもそのエネルギー量は膨大で、未知の技術が使用されている『ジュエルシード』のようなものがなければ、個人で引き起こすことは不可能とされている。

また、空間そのものを振動させる性質上、地震に似た揺れが起こることもある。

今回の次元震は小規模なもので収まったが、もっと規模が大きくなると次元断層が発生し、虚数空間への穴が出現し始める。

その穴が大きくなれば、最悪世界が崩落してしまう危険性があつた。それが次元災害と呼ばれるものの最終形である。

「それってもしかして、地球崩壊の危機だったりするの？」

「もしかしなくてもそうだよ」

次元航行艦『アースラ』の通路を歩きながら、クロノは言った。

ユーノがフェレットモードから人間の姿になったとき、何やら意見の相違からの騒ぎがあったようだが、喧嘩は後回しにしてもらった。

ブリッジに着くと、クロノは艦長席に座っていた水色の髪をした女性に、ある程度の事情を報告する。

なのはは、報告の内容よりも緑茶に砂糖をスプーン大盛り3杯投入して、『おいしい』と感想を言ったことが気になってしょうがなかった。

いや、実は欧米で緑茶に砂糖を入れて甘くする飲み方が実在する。

（：近所のコンビニで売っていた『スウィート・グリーン・ティー』という商品の説明に書いてあった）

しかし、たいして大きくもない湯飲みに、スプーン大盛り3杯の砂糖、というのはいかがなものだろうか。

やけに日本風の応接室に場所を移した。

畳が敷き詰められ、囲炉裏の周囲には竹を加工した質素な装飾具や障子、『鹿威し』^{しこあし}まで完備されている。

これはミッドチルダというところの流行なのだろうか？

ともあれ。

ユーノとなのはは艦長であるという女性リンディに事情を説明する。

ユーノが『ジュエルシート』を集める目的は、彼がその発見者だ

からだ。

ユーノの家族であるスクライア一族は考古学的な調査を目的とした遺跡発掘を生業としている。

その際、危険な古代遺失物『ロストログア』が発見されることもよくあり、発見された場合はミッドチルダの保管機関に送られることになっていた。

しかし、輸送中の事故により輸送船は大破し、『ジュエルシード』は地球にばら撒かれてしまった。

発見者であるユーノは、あるいは『ジュエルシード』の封印が甘く、また何かのきっかけで発動してしまったのかもしれないと考えて責任を感じ、管理局の出動を待たずに1人でこの地球へやってきたのだ。

ところが『ジュエルシード』は思念体を取り込んで発動してしまっており、取り押さえるべく戦うも撃退するに留まった。

この戦闘でユーノは手傷を負い、いるかどうかわからない近くの魔導師に向けて救援を求める念話を送った。

その念話を聞いたのが、偶然近くに住んでいた、高い魔導師の素養を持ったのはだったというわけだ。

ちなみに、地球の魔力素はユーノの『リンカーコア』と相性が悪く、少しでも魔力を節約するために地球ではフェレットモードになっていた。

今は『アースラ』内部に相性の良い魔力素が豊富にあることもあって、民族衣装に身を包んだ少年の姿になっている。

なのはがそれを手伝うのは、『ジュエルシード』が自分の住んでいる周辺に被害を与えかねない危険物だからである。

最初はそれほど乗り気ではなく、ただ成り行きで手伝っている感があつたが、連日搜索の疲れから人が拾った『ジュエルシード』を見

逃してしまい、結果的に街に大きな被害が出る大事件に発展してしまった。

それに責任を感じて、今では毎夜積極的に『ジュエルシード』を捜しに出歩いている。

彼女の認識では『ジュエルシード』は『風変りな高性能爆弾』である。

もう一つ、最近になって現れたのが、長い金髪ツインテール、黒いバリアジャケット
魔法衣の少女だ。

『ジュエルシード』が発動したのを察知してやってきて、強引に封印して持つて行った。

それ以降も異常とも思える執念で、『ジュエルシード』が発動した現場にやってきては強引な手法で奪っていったり、一方的に『ジュエルシード』を賭けた勝負を吹っかけ、奪っていったりした。事情を聞くとしても耳を貸さず、たびたび戦闘になっている。

『アースラ』が観測した次元震が起きたときも、どちらが『ジュエルシード』を手に入れるかで戦闘していた最中に、魔力弾の流れ弾が『ジュエルシード』に直撃したために発生したのだ。

そのときは普通の封印魔法が通じないと知ると、手掴みで暴走を押さえ込むという無茶なこともやっている。

なのはとしてはなんとか事情を聞き出し、できれば『ジュエルシード』集めに関しては協力していきたいと考えていたのだが、つい先程の発動では、フェイトは現れなかったのである。

どう考えても不可解だった。
何かがあったのは確かだろう。

「これより、ロストロギア危険遺失物『ジュエルシード』の搜索、及び回収については時空管理局が全権を持ちます」

リンディは告げた。

「はい」

ユーノは頷くしかない。

「あなた達は今回のことは忘れて、それぞれの世界へ戻って元の生活に戻るというわ」

「でも、それは！」

叫ぶような声を上げたのはなのは。

「これは次元災害に関わる話よ。この世界だけの話ではないの。個人の我儘を通していい状況ではないわ」

それで納得などできるはずがない。

自分には戦う力があるのに、手を出すことはおろか見ていることもできないと言われたのだ。

「まあ、急に言われても気持ちの整理も出来ないでしょう？一度家に帰って、今晚ゆっくり2人で話し合うといいわ。

その上で、改めてお話ししましょう」

実際に相談することなど何もなかった。

ユーノは『ジュエルシード』に関する専門家としても協力するつもりでいたし、なのははフェイトの件がある。

もう一度会って話をしたい。

それが偽らざる彼女の本心だった。

ゆえに、なのはが行なったのはユーノとの相談ではなく、家族との相談だった。

しばらく学校を休みたいことと、その間外泊すること。

「それは、どうしてもなのはがやらなければならないことなのか？」

「うん」

「そうか。じゃあ、後悔だけはするな」

「うん、ありがとうなの。お父さん」

「あと、身体に気をつけてな。手に負えなくなったらいつでもお父さんに言いに来なさい」

兄は心配していたが、父は特に反対することもなく承諾した。

「私、もう一度フェイトちゃんに会いたいです。だから、『ジュエルシード』探しに協力させてください」

「僕も協力させてください。ただ見ているだけなんて、絶対に後悔するはずですから」

リンディがその話を聞いたとき、自分の想像を遙かに超えた返答に驚いた。

家族の了解を得ることなど、必要な手続きをすべて済ませ、しかしユーノとはほとんど言葉を交わしていなかったのだ。

2人にとっては何をどうするべきかなどわかりきったことで、そのために必要な手続きを済ませるためだけに、一度地球に戻ったに過ぎないのである。

その覚悟の決め方は、リンディ達管理局員と較べても遜色無い。

危険だと思った時は強制的に下がらせるため、『アースラ』側の指示には従ってもらうことなど、安全確保のためのルールを守ることがリンディは2人に約束させたが、おそらく必要ないだろうと思った。

リンディやクロノにできることは、2人の邪魔をしないことだけだと、否応無く感じさせられたのだ。

数日後。

「艦長、どう思います？」

執務官補佐である茶髪の少女エイミー・リミエツタが尋ねる。

『アースラ』は、別な意味での奇妙な現実と直面した。

地球から『ジュエルシード』の反応がなくなったのだ。すべて回収し終えたということである。

それでも14個。

その間フェイトは一度も姿を現さなかった。

地球に出てきた痕跡もない。

ということは、最初にフェイトが確認された後、姿を消すまでの10日ほどの間で、7個もの『ジュエルシールド』を集めていたということになる。

なのはが『アースラ』に搭乗してからの回収数は、10日間で8個。

7個集めていた以降は姿を現していないとはいえ、捜索用の設備が整った次元航行艦に匹敵する数字である。

個人で叩き出すには、『特殊能力^{レアスキル}』が相当な経験が必要になるだろう。

そうでなければ、組織的なバックアップしか考えられない。

しかし。

最後にフェイトの姿を確認した時、魔力放出によって無理矢理『ジュエルシールド』を発動させるという荒業を行っていた。

『特殊能力^{レアスキル}』があるのならそんなことをする必要はない。

同様に組織のバックアップがあるのなら、自分でそんな無茶をする必要はない。

また、見た目だが、なのはと同じくらいの年齢らしい。

その外見を信用するなら、高い経験値を持つている可能性も消える。

「正直、わけがわからないわ」

リンディは思わず呟いた。

何か、異常が起きているのは明らかだ。

何が起きているのかは全くわからないが。

ともあれ、『ジュエルシールド』の反応が消えた以上、いつまでもな

のはとユーノを『アースラ』に留めておくわけにもいかない。誘導するような言い方で優秀な魔導師であるのはとユーノから協力の言葉を引き出したとはいえ、リンディも一児の親である。長く姿を見せない娘を心配する親の気持ちは、よく理解できた。

実際になのはは自分の目的である、フェイトという少女との対話のために、よく仕事をこなしてくれていた。

魔力貯蔵量、変換効率、最大出力の点でかなり資質が高く、また戦闘センスや並列思考、魔法の高速展開についてもかなり高い才能を確認できている。

経験不足は否めないが、逆に言えばまだまだ成長するということだ。ちゃんと鍛えれば、総合ランクでオーバースもそれほど難しくないだろう。

はつきり言つて、10年に1人いるかないかという、逸材である。

それだけに、こんなところで無理をさせたくはないし、ここで余計なことをして心象を悪くしたくない。

何より、これだけ頑張ったのだから、元々の目的を達成させてやりたい。

それは他の何よりも、彼女達にとって人生の糧となるはずだから。

第5話 アースラ（後書き）

第五話。

アースラサイド、クロノ初登場です。

原作では戦闘になっていましたが、フェイトサイドが大変なことになっているので、フェイトは出てきません。

本来の主人公なのは精神を、少し高めに描写しています。そうしないと、後で空気になりそうだったので。

第6話 不可解、理解

プレシアは目覚めた。

いつもの、自分の寝室。

余計なものは売り払っており、装飾品の類は一切ない、壁紙すら貼っていない、殺風景な部屋。

体の調子は悪くなさそうだ。

それがおかしいと感じる。

医学知識があるからわかるのだが、意識を失う前の発作でプレシアは命を落としていても不思議はなかった。

『集積器官変異症』とは、徐々に『リンカーコア』が変質していき、肉体に害を及ぼす病気である。

決して不治の病ではないのだが、症例が極端に少なく、ゆえに治療法も限られる。

治療にはミッドチルダへ行く必要があるのだが、治療用の設備があるのが管理局の管轄下にある大病院なのだ。

アリシア

娘の蘇生という違法研究に手を染めている以上、治療を受けるのは同時にアリシアの蘇生を諦めるということの意味していた。

娘を諦めることなどできない。

ならば、自分で作り出すしかない。

しかし、『日和見症候群』の発症が彼女から時間を奪っていき、思考能力を奪っていった。

寝室に調度品の類がないのは、雑菌やカビなどの繁殖を極力抑えるためである。

そんなとき、『ジュエルシード』の情報が出てきたのだ。
おそらくエネルギー貯蔵装置の一種。

それは同時に『所有者の願い事を叶える』という性質を持っていた。

その情報から因果律の干渉への可能性に辿り着く。

ただ、それだけで人間が蘇るのなら、誰も苦勞はしない。

それが可能だったなら、世の中にはもっと永遠の命を得た人間が闊歩しているだろう。

だが、それに繋がる鍵となりうる可能性はあった。

すなわち、超技術文明の世界『アルハザード』への切符である。

病気のため、研究を続けるにはあまりに時間がない。

ならば、たとえ御伽噺であつたとしても、『アルハザード』に賭けてみようという想いができた。

今から思えば、何も考えずに縋りついたのだろう。

『ジュエルシード』探しは、思いの外順調に進んだ。
フュイト

失敗作に戦闘技術を教え、送り出すまでに少々時間はかかったが。

最初の1週間ほどで7つもの『ジュエルシード』を確保できていたのは予想外だった。

希望が見えてきたところで立ちはだかったのが、『アルハザード』からやってきたという、ピュアである。

あの異様な白さを持つ少女は、プレシアの最後と言つていい希望を、粉々に砕いてしまった。

プレシアは、娘が蘇生した後のことを、何も考えていなかったのだ。
『アルハザード』の技術がどんな代償を求めるかなど、まったく思

慮の外だった。

ピュアがその話をしたとき、どんな表情だっただろうか。
全身が真っ白で陰影がわかり辛いため、表情もあまり記憶に無い。

そこまで考えたところで、手の平に温もりを感じた。

「かあさ……」

ベッドに寄りかかったまま寝言を漏らすのは、金髪ツインテールの少女フェイト。

以前まで感じていた嫌悪感は沸かなかった。

フェイトと自分の罪を較べれば、自分の方が遥かに罪が重いことを自覚した？

体調が良くなったことで、心に余裕ができた？
考えられる理由は色々があるが、結論は出ない。

酷いことをしてきたと思う。

その自覚はある。

フェイトも、よく耐えてきたと思う。

ただ1つ、縋るべきものがプレシアだったのだとしても。

流れる金髪を撫でる。

そして気付いた。

フェイトに嫌悪感を抱かない理由。

それは。

もう何もかもが、どうでもよくなったからなのだ。

生きる目的を見失ったと言ってもいい。
だから、別の生き甲斐を探そうとしている。

自分が娘の蘇生^{アリシア}を諦めようとしているのだと、このとき初めて実感した。

頬を涙が伝う。

このくらいは許されてもいいだろう。

泣くくらいのは、赦されてもいいだろう。

せめて、眠るフェイトを起こさないように、声は押し殺して。

全部話してしまおう。

プレシアは思った。

ずっと1人で抱えてきたことについて、誰かにぶちまけることで、楽になろう。

その結果、フェイトに殺されることになるのなら、それでもいい。
管理局に突き出されるのなら、それでいい。
自分はそれだけのことをしてきたのだから。

しばらくして。

目覚めたフェイトがプレシアに縋り付いて、無事を喜び泣いていた。
そんなとき。

「ああ、ちょうどよかったさ」

様子を見に来たピュアが、『時の庭園』にあった予備のデバイスで

作ったレポートを持ってきた。

そして、ピュアがプレシアに何をしたのかということの説明を、まずは一通り聞く。

それで妙に体調がいいことについて、説明がついた。

リンカーコア
魔力集積器官の変質そのものは治せていないが、魔力の過補給による自然治癒力の活性化を行ない、体力を回復させたのだ。

理論上、魔力を注ぎ込んで充溢させれば、魔導師なら魔力集積器官からの影響を受けてある程度体力を回復させることは可能だというレポートを、プレシアは見たことがあった。

だが、それは魔力の貯蔵量が底をついていた場合の、疲労感を回復する意味だと思っていた。

それに、他者の魔力集積器官を溢れさせるとなると、凄まじい魔力集積能力が必要となる。

リンカーコア
魔力集積器官は必要以上の魔力素を吸収しにくいという性質があるのだ。

吸収されずに散ってゆく魔力を超える量を注ぎ続けなければならぬというのは、とても現実的な方法ではなかった。

しかし、ピュアの魔法はミッド式のそれとは根本的に思想が異なる。
回復用の結界を展開し、それそのものを擬似的な『リンカーコア』にしてしまうのである。

もちろん、普通のものに較べて集積能力は低いが、内部に高濃度の魔力を満たすことで魔力の過補給を維持する条件を整えることができる。

これはミッド式では不可能な方法だ。

使い魔やユニゾンデバイスに使用される『擬似リンカーコア』を、即席で作るようなものである。

『擬似リンカーコア』作成のための技術が必要になるし、結界内すべてとなると技術が確立していない。

一度術式に結合された魔力ならともかく、変換前の魔力素を集積する結果など、確認されたことがない。

元々そんな発想すらなかったのだ。

精々、消費した分を直接の受け渡しで補充する程度しかできない。

プレシアが今まで触れたことのない、未知な魔法技術であることは間違いなかった。

そして。

問題は次の、ピュアが作ってきたレポートだ。

彼女自身はデバイスというものを扱ったことがないらしく、使い方はアルフに教わったという。

内容は。

『『ジュエルシード』の使用方法和その性質についての解析、検証結果』

プレシアが眠っていた3日間で作り上げたのだそうだ。

理由はわからない。

いや、レポートを読み進めると、その目的は見えてきた。

まず驚いたのが、ピュアなら『ジュエルシード』を暴走させず、ほぼ自由自在に扱うことができるということ。

デバイスに記録された映像には、何度も『ジュエルシード』を発動

させるピュアの姿が映っていた。

『ジュエルシード』とは、『擬似リンカーコア』内臓型のデバイスである。

ユニゾン
擬似融合する性質を考えると、ユニゾンデバイスの一種と言うこともできるかもしれない。

魔法選択は祈祷式で、念話のような思念波を受け取って発動する。

ミッド式のデバイスの中で人型デバイスと呼ばれるものがこの方式で、状況や脳波パターンの変化を計測し、AIが自動で使用するべき魔法を選択するというもの。

『ジュエルシード』の場合は深層心理にまで踏み込み、所有者が叶えたい心の奥底で眠る『願い』を受信し発動する。

当然デバイスであることから、使用できる魔法も叶えることができる願いも限られる。

実現可能なものについては融合するなりして普通に実現する。

実現不可能なものについては内蔵されているAIのようなものが判断し、ある程度『願い』を曲解して実現してしまうようだ。

ピュアは特殊技能として『レアスキル情動感応エモーションナル・レセプション』があるため、自分の深層意識を操作し、願う内容を書き換えることができる。

だからピュアは取り込まれずに自由自在に発動させることが可能なのだ。

重要なのはここからである。

『ジュエルシード』は膨大なエネルギーを内蔵し、発動方式や使用方法、利用している魔法の構成などがミッド式とはかなり異なる。ピュアの故郷の魔法とも異なっているため、色々と使い方を試しな

がら、利用されている術式構成を列挙していた。
わかりやすく言えば、使用可能なプログラム言語を手探りで探していくようなものである。

プレシアが気になったのは、それが人体蘇生に関わる重要なものばかりということであつた。

そして予想外なのは、そのうちの1つが成功している点である。

それは望んだ『魂』を精製し、器である肉体に吹き込む実験であつた。

マウスの死体からクローンを複数作り、オリジナルとの僅かな性質の違いを埋めるために、『魂』の精製を行なつたのである。

『魂』とは、ミッドチルダの技術に全く無いわけではない概念である。

使い魔作成時に擬似魂魄を作る際、用いられるものというイメージが一般的だろう。

しかし実際は擬似魂魄を作る術式は存在するのだが、擬似魂魄『魂』がどういう理論の下に作り出されているのかを解明した者がいない。

ゆえに、ミッドチルダでは『魂』の概念の存在は認められているが、全くと言っていいほど研究が進んでいないのが実情なのだ。

だが、最初の実験では失敗していた。

ピュアの注釈コメントによると、ピュアの故郷では『魂』の概念が重視されていたとはいえ、プレシアが求めているような完全な複製となるとどうしても『器』の問題が出てくるという。

『魂』は『器』によって微妙にその形を変えてしまうことがあるそうだ。

だから今回のように、単にそれらしい『魂』を作り出しただけでは

完全な複製体ができないのである。

これに関しては、体内のどれかの臓器が『器』の役目を果たすことまでは判明していたが、どの臓器なのかは全くわかっていない。もしかするとクローン体なら『魂』の変化が起きないかもしれないと考えたようだが、現実には失敗している。

成功した、というのは、地球にいるときにテレビで見たある番組が紹介していた症例から、推測を立てたのである。

それは心臓移植にまつわる逸話であった。

心臓提供者の性質や細かい癖が、移植を受けた者に顕れたというのだ。

それはつまり、心臓移植によって『魂』が変化を起こしたということに他ならない。

『魂』の『器』は心臓だったのだ。

これは内科治療技術や万能細胞技術が発達したミッドチルダや、強力な回復、治癒魔法のあるピュアの故郷では、発見されないであろう例であった。

地球のようにリスクの大きい原始的な臓器の直接移植を行うことが、まずないのである。

『ジュエルシード』は偶然『地球』に降り注ぎ。

ピュアは『時の庭園』現れ。

その間に心臓移植の話をテレビ番組で放映し。

それがピュアの目に留まる。

最後に、すべてを實現できる機材が『時の庭園』には存在し。

プレシア、すなわち自分には、それを実現できるだけの知識と経験がある。

これだけの偶然が重なって起きた奇跡であった。

「しょうがないわねえ」

苦笑する。

プレシアは深い闇を照らす光を見た気がした。

何もかもを投げ出してしまいたいと思っていたのに。

深い挫折を認める努力をしなければならなかったのに。

投げ捨てたそれらを再び拾い集めなければ、という意欲を感じる。

心の底から、気まぐれでピュアを殺してしまわなかった自分に感謝した。

そして命の危険を押してまで自分を諭してくれたピュアに感謝する。最後に、ピュアをこの『時の庭園』に転生させてくれた、運命の悪戯に感謝、だ。

第6話 不可解、理解（後書き）

第六話。

原作には無いシーンです。

この話を付け加えた理由は、A SのED後の話に出てきます。
作者的にはそうでもないんですが、ピュアにとってこれは必要な行動です。

そして、ピュアを語る上で外せないエピソードですね。

第7話 ウィジャボード

プレシアは目覚めたフェイトに、全ての真実を話した。

「あなたはね、フェイト。私が生んだ娘アリシアのクローンなの」
「えっ……!？」

「アリシアに仕立てようとして失敗した、それでも、私の娘だったのよ。」

長い間、ずっと意地になって私は認めなかったけれど」

「母さん……」

「馬鹿よね。ピュアに言われるまで、私の目は節穴もいいところだったのよ」

思い出したことがある、とプレシアは話す。

それは、『フェイトをアリシアにする』方法。

ピュアの『魂』に関するレポートを見ていて、思い出したのだ。

それはアリシアが存命中に調べた方法。

つまり、子育て方法。

子供は最大限に親の影響を受ける。

思い通りに育てようとするなら、親がイメージした通りの名前をつけるべし。

そうすれば多少の差異はあれども、その通りに育つ。

天才として育てれば天才に、職人として育てれば職人に、戦士として育てれば戦士に。

つまり、フェイトにもしもアリシアと名付けアリシアとして育てていれば、フェイトはアリシアになったかもしれないのである。

「覚えておきなさい。計画とは失敗するべくして失敗するものよ」

特に、今回のように生命を扱う場合、失敗した後のことを考えずに実験を行なってはいけない。

あるいは、失敗した後も、限りなく成功に近付くように努力しなければならぬ。

プレシアの最大の失敗は、フェイトを失敗と決め付け、その後の努力を怠ったことである。

フェイトがアリシアになる可能性を親が否定してしまったら、もう二度とフェイトがアリシアになることはないのだ。

しかし、フェイトは母の思う通りになろうと努力していた。

与えられた記憶に従い、アリシアになろうとしていた。

それを察知していれば、まだフェイトという名のアリシアに育てることができたかもしれない。

だが。

もう、ここまで来てしまったら、取り返しがつかない。

フェイトはフェイト以外の何物でもなくなってしまった。

他ならぬプレシアが、そうしてしまった。

プレシアのつまらない意地が、フェイトを失敗作にしてしまった。

ここまで来てようやく気付いたのは、フェイトが失敗作であれども人形ではないということだ。

プレシアが自分の不始末で育て損ねただけの、プレシアの娘だったのである。

そのことも、プレシアは意地で認めなかった。

すべてはピュアがプレシアを言外に諭してくれたから。

『このままアリシアを蘇らせても、アリシアは苦しむだけだ』

と。

だから、現実から目を背けることをやめたのだ。
涙を吞んで、現実を受け入れることにしたのだ。

ただ、アリシアを蘇らせたいというプレシアの想いは変わっていない。
この期に及んで。

それは、ピュアのレポートを読んで、自覚してしまった。

ならば、自分にはそう動く義務がある。

どういふ結末にせよ、最後に正しく失敗し、諦め切らなければなら
ない。

そうしなければ、自分は前に進むことができない。

「だから、フェイト。『ジュエルシード』を持って、管理局へ行き
なさい。

これ以上ここにいたら、共犯者になってしまうわ」

「……」

フェイトは黙って聞く。

この話を聞いてしまった以上、管理局が踏み込んできた場合、共犯
を否定する材料がなくなってしまう。

「私はアリシアを蘇らせるわ。

それが気に入らないというのなら、通報しなさい。

この『時の庭園』はここから動かさないから。

あなたにはその権利があるわ」

「そんなこと、できない」

「アリシアを蘇らせたなら、あなたがそうしなくても、私は管理局に投降するつもりよ」

「母さん……！」

「罪は罪だもの。償わなければ、あなたやアリシアに顔見せできないわ」

「……」

「それにね。フェイトに止められるのなら、私は納得できると思うの」

プレシアはフェイトの金髪を撫でながら続ける。

「あなたも、私の娘だもの」

葛藤がないわけではない。

フェイトの記憶、行動原理は、生前のアリシアのそれを受け継いでいるのだ。

管理局の法律に背くことには抵抗がある。

しかし、それ以上に母の想いがかけがえのないもののように思えてならない。

フェイトが選んだのは、母のことを黙っていることだった。

一度だけ『本当にそれでいいんだね』と再確認したのはアルフただ1人。

それは使い魔として必要なことであるし、仕方がない。

ピュアは話を聞き、

『そう』

とだけ言って頷いた。

地球での拠点にしていたマンションを引き払う手続きを行い、フェイトは決めていた通りに管理局へ通信を行なおうとする。
単純に気分的な問題で、マンションの屋上から。

「あ……」

白い魔法衣バリアジャケットの少女なのはの姿が頭を過ぎった。

どうしよう。

もう一度会いたい。

彼女は地球出身らしいため、下手をすればもう二度と会えなくなる。
その前に。

中途半端に終わっていた決着をつけたい。

フェイトの事情が一応解決したことを、伝えたい。

とても心配していたように思うから。

管理局員に事情を話せば、伝言は伝わるだろう。

しかし模擬戦はおそらく無理だ。

どうにか、管理局を介さずに話をしたい。

「どうしたんだい？フェイト」

「あ、アルフ……」

おそらく、精神リンクでこの迷いが伝わったのだろう。

フェイトはアルフに正直に話した。

「そうだねえ……もう管理局が来ててもおかしくないから、念話は

届かないかもしれないよ」

「うん、そっか……そうだね」

フェイトはさらに悩む。

『ど、どうしよう、ピュア』

自分の不用意なひと言でより深い思考の海に没してしまったフェイトを見て、アルフは同じ屋上で空を眺めていたピュアに泣きついた。

そしてピュアは1つの方法を提示する。

それは妙案と言うよりも、反則^{チート}技であった。

ピュアの身体に埋め込まれた魔法具『ウィジャボード』を用いて、フェイトとなのはを『接続』するのである。

そうすれば、なのはがどこにいても確実に念話が届く。

要は、魔力爆撃用の『ロストロギア』を、念話のためだけに使用しようと言うのだ。

「大丈夫？それって身体にかかる負担が大きいんじゃないか……」

話を聞いたフェイトはピュアの肉体への負担を心配する。

しかし、当の本人は『大丈夫さ』と言った。

「最初に使ってた探査魔法くらいさ」

「大丈夫だって判断していいか微妙なところだねえ」

「うん」

ピュアは広域探査魔法を使うと、その日は寝込み、翌日も昼くらいにならないと完全に回復しないくらい体調を崩す。

また、自分の肉体の負担に関しては無頓着なところがあり、無理を押し付けても負担の大きい魔法を使おうとする。
だから、この手の『大丈夫』は、アルフもフェイトも慎重に考えることにしていた。

まあ、後はフェイトとなのはの勝負だけである。

管理局が出てくるとしても、敵対する意思はないし、勝負の間はアルフが護衛すればいい。

色々と協力してくれているので、アルフとしてもピュアの護衛に抵抗感はなかった。

ただ、問題はピュアに負担をかけてまで望むようなことか、である。ピュアはフェイトにとっては善意の協力者だ。

ただでさえ弱い体を押し、しかも立場が悪くなることさえ省みず、探查魔法で協力。

さらにプレシアと命懸けの対談を申し込み、最悪だった親子関係に良い意味で変化をもたらした。

既に、感謝しても感謝しきれないほど、世話になってしまっている。これ以上ピュアに負担を強いるのは、フェイトの良心が咎めた。

「わたしは、フェイトちゃんに心を残してほしくないさ」

「でも……」

「なのはちゃんのこととで心残りを作ると、それは多分、ずっと残ると思うさ。」

わたしのことを気にして、そんな心残りは作ってほしくないさ」
「……うん、わかったよ」

ピュアの悲しそうな微笑みを見て、結局フェイトは折れることにした。

もしかするとピュア自身にも、そんな苦い思い出があるのかもしれない。

それならば、ピュアの心残りにしないためにも、思うのは。

自惚れだろうか。

第7話 ウイジャボード（後書き）

第七話。

原作とは別の展開で、決闘に持ち込みます。
無理矢理だなんていわないで下さいorz

プレシアの心変わりについて。

思うんですが、あれって病気のせいで思考が重くなっていた結果なんじゃないかと。

もし無理矢理に体力を回復させれば、こんな風に別の結論に辿り着いた可能性もあるんじゃないかと思いました。

第8話 決闘、決着

『アルハザード魔法』という魔法体系が存在するのだそうだ。

魔法陣で言語基盤フォーメットを設定し、術式プログラムを通して魔力を結合する補助とする。

この原則はミッド式意外にも多くの魔法体系が共有していた。
ピュアの故郷の魔法も例外ではない。

『魔法技術の理想郷アルハザード』にいたと言っただけあって、ピュアはただ1つだけ『アルハザード魔法』を使用することが出来た。

もつとも、ピュアの頭脳をもつてしてもそれは複雑難解で、脳にかかる負担も大きいのだとか。

言ってしまうと、知恵熱が出るのである。

ピュアの肉体に埋め込まれている『ウィジャボード』の起動には、それだけの手間がかかるのだ。

ゆえに、使い終われば気が抜けて、しばらく意識を失ってしまう。

それがフェイトに対するピュアの説明だった。

使用する『アルハザード魔法』は、ただの検索魔法である。

『アルハザード魔法』だけあって検索速度が凄まじい。

……はずだが、実際には『接続』完了まで30分かかった。
さすがにピュア1人では、『アルハザード魔法』の完全再現が難しいのかもしれない。

ともかく。

『アルハザード魔法』の魔法陣は、今までに見た事もないものだった。

た。

そしてすべての魔法の起源と言われれば、納得できるものだ。

円形や2重三角形など、矩形の組み合わせではなく、ピュアを中心とした球状だったのである。

複雑すぎて何がどうなっているかなど、全く解らない。

ピュア自身も使えることは使えるが、詳しい内容を説明しろと言われてもできない。

なにしろ、母親が死に物狂いで解明したものの、娘は使い方しか教わってはいなかったのだから。

「ジュモンガチガイマス
“ 検索開始 ”」

なぜかは解らないが、フェイトは取り返しのつかないことをやってしまった焦燥感を覚える。

思わず自分が使っている魔法の術式をチェックしようとして、気付く。

既に、すべて動作チェック済みだ。

今まで使っていたままの術式も少くない。

なぜそんな焦燥感を覚えたのかと首を傾げていると、ピュアから声をかけられた。

「……………OKさ」

「う、うん……………」

フェイトは事前に説明された通りに魔法陣の中に入り、なのはに念話を送る。

あまり時間をかけては、ピュアが持たない。

『アースラ』食堂。

『え、ええつと、き、聞こえてる?』
「にやつ!？」

突然響いてきた念話に茶髪ツインテールの少女は驚きの声を上げた。

「どうしたの、なのは？」
「えつと……」

人型モードのユーノに尋ねられ、うろたえる。
そしてどう説明したものか、悩んだ。

『お願い応えて、ちよつと時間が……』
『あ、うん。こちらなのはなの』
『よかった……』
「え、念話? 誰から」
「ちよつと待っててなの」

ユーノを軽く制し、なのはは念話に集中する。
マルチタスク
高速思考ができるとはいえ、今はこのフェイトからの謎の念話に集中したかった。

『フェイト、ちゃんなの?』

『うん。いきなりだけど、これで多分最後だから』

『え……?』

『決闘。受けてくれる?』

『……うん』

一瞬なのは考えようとしたが、何も考える内容が浮かばなかった。彼女にとっても願ってもないことであり、今ここで頷かない理由が何もない。

『海鳴臨海公園の近くの海岸で、待ってる』

『うん。すぐに行くの』

『ありがとう』

念話が切れた。

それ以降、繋がらない。

「誰から?」

「フェイトちゃんから」

「……えっ?」

ユーノは頭を抱えた。

「決闘したって」

「うん、それはいいけど……『アースラ』の中に直接届いたの?」

「えっと……」

ユーノに問われ、なのはは言葉に詰まった。

そう、2人のいる場所は次元航行艦『アースラ』の内部である。本来地球からの念話など届くはずがないのだ。

外部からの念話妨害を受けなかったために、外部からの念話を含めた通信はすべて一度システムを通す。

この場合はエイミーが取次ぎ、許可を出すわけだ。
だから敵方であるフェイトの念話が直接届くことなど、本来はありえない。

「でも、確かにフェイトちゃんだったの」
「そっか」

なのはが頑なに主張するのを見て、ユーノは反論を止める。
そう長い付き合いではなかったが、なのはがこうなっては事実を見る以外に頑として聞かないだろう。

2人は互いに頷き合い、席を立った。

通路を走っていくと、前方からクロノがやってくるのが見える。

「2人とも、そんなに慌ててどうしたんだ？」

「あ、クロノ君……」

「念話が届いたんだ。なのはだけに、直接」

「気のせいじゃ……ないみたいだな」

クロノは台詞の後半、なのはの目に灯る強い意思の光を見て、自分の意見を否定した。

元より『ロストログア』の関わる案件である。

常識で考えていては痛い目を見ることを、彼はよく知っていた。

「僕も行く」

言いながら、クロノは艦橋^{ブリッジ}への通信を開く。
短い茶髪の少女が対応した。

『クロノ君、どうしたの？』

「なのはがフェイトから念話を受け取った。

多分、『ロストログア』が使用されてる。3人で降りて状況を確認したい」

『転送ね。艦長、どうします？』

『畏の可能性は……』

『考慮しています』

『よろしい。許可します』

元々リンディも、事態が動かないことに焦っていたのだ。

多少のリスクを勘案しても、何かが起こったというのなら動かすべきだろう。

フェイト側はクロノの存在を知らないため、畏^{ファクター}があるのならクロノの存在が重要な要素になるはずだ。

願わくば、これが事件解決への糸口になってほしいところである。

海鳴臨界公園。

磯の香りの漂う、海辺の遊歩道。

「アルフ、お願いね」

「うん。何があるかと必ず、守って見せるよ」

アルフが頷くのを見て、フェイトは頷き返し、割と近くに転送されたのは視線を向けた。

他に2人いるが、手を出してくる様子はない。

ピュアは。

やはり『ウィジャボード』使用の負担が大きかったのか、今は意識を失ってアルフの腕の中で眠っている。

「場所、移そうか」

「そうだね」

フェイトが言っただのはが頷く。

「クロノ君、手を出しちゃダメだよ」

なのははクロノに釘を刺した。

「わかった」

逆らえば攻撃されそうだったので、クロノはとりあえず頷き、見送る。

畏もなさそうなので手は出さないが、一応話を聞いておく必要はあるかもしれない。

しかし何より、もしも決闘が殺し合いに発展するようなことになれば、止めに行かなければならない。

そうなった場合、意識の無い少女がともに戦えるわけがないため、戦力と言えば3対2で有利だ。

わざわざ手を出してなのはを敵に回すことを考えれば、今は大人し

く話でも聞いておくのがいいだろう。
クロノはそう判断した。

「その子は？」

「アタシ達の大切な恩人だよ。絶対に傷1つ付けさせないからね」

アルフは『下手に動けば殺す』とばかりにクロノを睨む。

こんな反応を返すという事は、おそらくフェイトにとってもこの白髪少女は弱点となりうるということだ。

しかし、逆に言えばそれだけ奪って人質にするのは難しいということになる。

おそらく簡単には渡さないだろう。

「意識を失っているようだが、どうしてだ？」

「っ……今は関係ないだろ！」

アルフが声を荒げる。

聞いてほしくないことらしい。

クロノは質問を変える。

追求すれば、態度を硬化させるだけだろうから。

海鳴市近海の上空では、熾烈な戦いが繰り広げられていた。

直射魔法と誘導弾、あるいは砲撃。

互いに攻撃を叩き込み、回避し、防御する。

射撃はなのはに分があり、スピードや白兵戦ではフェイトに分があ

るようだ。

ゆえに、なのはは相手を近づけさせないように射撃を絶やさず、フ
イトは応戦しつつどうにかして近付こうとする。
互いの得手不得手のはっきりとした戦いとなった。

「どうやって次元航行艦内部にいる、なのはだけに念話を届かせる
ことができたんだ？」

クロノは問う。

できれば答えてほしい、最大の謎だった。

「……後で話すよ」

黙秘、ときた。

いや、正確にはそうではないのか。

あるいは、先に拒否した質問の内容に関わってくるのかもしれない。
また、質問を変える必要があるそうだった。

「どうして今頃になって出てきたんだ？」

「なんだって？」

「しばらく姿を現さなかっただろう？あれがなければ大半の『ジュ
エルシード』がそちらの手にあつたはずだ」

「こっちもトラブルがあつたんだよ………そういえばクロノって言う
たね？」

「あ、ああ」

急に質問が返ってきて、一瞬対応が遅れる。

「クロノは管理局の局員か何かかい？」

「僕は管理局の執務官だよ」

「ああ、そういうこと」

アルフは納得したとばかりに頷いた。

少し警戒が薄れたように感じる。

「質問の内容に答えてもらってないぞ」

「『ジュエルシード』を集める理由は、アタシ達にはもうないのさ」

「どういうことだ？」

「フエイトの母親が倒れたんだよ。それから人が変わったみたいに優しくなってね……」

「『ジュエルシード』を探すどころじゃなかったのか」

クロノは納得する。

少なくとも、2人が管理局に敵対する理由はなくなっただけらしい。

「ちょっと待って」

そこにユーノが口を挟んできた。

何を言うつもりだろう。

下手なことを言っただけ刺激してほしくないものだが。

「それって、『ジュエルシード』の力で人格が変わったってこと？」

「!？」

クロノは目を見開く。

その可能性は考えていなかった。

『ジュエルシード』の性質をよく知るユーノだからこそ、気付くこ

とが出来たと言えるだろう。

「そうか、『ジュエルシールド』は願いを叶える『ロストロギア』……」

「違う。それに『ジュエルシールド』は関わってないよ」

アルフはユーノの言葉を否定した。

決闘は佳境に差し掛かった。

周囲に連続して出現する魔法陣に惑わされ、なのはがフェイトの拘束魔法で手足を拘束されてしまう。

「『フォトンランサー』、フランクスシフト」

毎秒7発の魔力弾を連射し続ける『フォトンスフィア』を38基展開する、フェイトの切り札。

合計1064発の魔力弾を叩き込む。

この数の暴力の前には、どんな防御も砕かれて終わるだろう。

しかし。

無数に浮かぶ直射弾の射出基である『フォトンスフィア』から、拘束されたなのはに向けて猛攻が叩き込まれ、周囲は煙に包まれる。煙が晴れた時、高い防御力を誇る白い魔法衣は、若干ダメージを受けて汚れてはいたものの、健在だった。

そして茶色いツインテールの少女の目にも、闘志は未だ健在。

「撃ち始めると、拘束って解けちゃうんだね」

「くっ……！」

その言葉に自分のミスを知ったフェイト。

それでも、あの連射をあのタイミングで避け切るのは不可能、つまり何割かは食らったはずだが。

その何割かに耐えたというのが。

慌てて周囲に浮かぶ『フォトンスフィア』の残骸を集め、1つの大きな誘導弾に纏め上げる。

「今度はこっちの……」

デイヴァイン

“ Divine ”

「番だよ！」

バスター

“ Buster ”

帯を繋いだ環状に展開した魔法陣の内側で、桃色の魔力光が球状に膨れ上がり、一気に放たれた。

フェイトも今しがた作り上げた大きな誘導弾を放ち、迎撃する。

ほぼ溜め無しの砲撃だから、これで相殺できると思っていたフェイトの誤算があった。

黄色の魔力光の大きな誘導弾は、なのはの砲撃によって一瞬で吹き散らされてしまう。

誘導弾を射出したばかりのフェイトに回避する余裕はなかった。

インテリジェント

辛うじて人格型デバイスである『バルディッシュ』が反応し、防御魔法を展開する。

しかしそれでも受けきれない魔力の奔流が、フェイトの黒い魔法衣バリアジャケットを徐々に裂いていった。

「（あの子も、耐えたんだから　　！）」

気力と魔力を振り絞り、フェイトはその砲撃に耐え切る。

これで仕切り直し。

切り札を使ったフェイトの方がやや不利か。

だが。

だがしかし。

上空で膨れ上がる桃色の光が、フェイトの目に入る。

「なっ……！？」

そこにいたのは、巨大な魔法陣を展開し、周囲から魔力を集めるなのはの姿だった。

「受けてみて、『スターライトデイベインバスター』のバリエーション……」
“ブレイカーStarlight Breaker”

フェイトは慌てて回避行動を取ろうとする。

しかし、いつの間に仕掛けていたのか、桃色の拘束魔法バインドがフェイトの手足を拘束した。

「あ……」

今のフェイトにできることは、防御を最大にして備えることだけ。
あるいは、一瞬でも早く拘束が解けることに期待して、高速移動魔法を用意しておくか。

「受けてみて、これが私の全力全開！！」

“『スターライト・ブレイカアアアッ！！！！』”

放たれる桃色の奔流。

それはまさに大河を髣髴とさせる。

そしてフェイトは回避することを諦めた。

耐えるしかない。

全力で。

「バルディツシュ！」

“リカバリ”

とりあえずではあるが、先の砲撃で損傷した魔法衣を修復させる。
バリアジャケット

そして残るすべての魔力を防御魔法に注ぎ込んだ。

高速戦が専門のため、防御はどちらかというと苦手だ。

だが、耐えなければならない。

桃色の『壁』は一瞬でフェイトを呑み込んだ。

辛うじて押し流されなかったのは、僅かな時間の中でもそれなりの準備を整えられたからだろう。

しかし。

ものの2秒かそこらで防御魔法がヒビ割れた。
ラウンドシールド

次の2秒で完全に砕け散る。

そのあと。

意識が戻ると、なのはの腕に抱えられていた。
負けたのだ。

だが、なぜだろう、嬉しかった。

さっぱりとした、心地良い清涼感がフェイトの体を包んでいた。

第8話 決闘、決着（後書き）

第八話。

原作にもある、海上の決戦、フェイトVSなのはです。

結果はあまり変わりませんが、フェイトが一瞬防御行動を取っています。

原作と違ってフェイトの体調が万全に近かったため、多少手強くなりました。

ついでにクロノが黒いです。

戦闘になっても有利になるように立ち回りつつ、アルフから情報を引き出しています。

なのはが敵に回ることを考慮しているあたり、実戦を経験した執務官らしいんじゃないでしょうか。

ジュモンガチガイマスの元ネタは、基本はドラクエ2です。

他にも色々と復活の呪文という形式のゲームがあつたので、別のゲームにもこのネタはあるかもしれません。

ただ、ドラクエ2ほどのインパクトはそうそう無いと思います。

最悪と称されるゲーム難度に加え、あの長つたらしい復活の呪文があります。

最後になるほど入力が長くなり、ミスする確率が上がりますからね。あれに泣かされた人は多いんじゃないでしょうか。

第9話 事情聴取

取調室。

「どうしてもかい？」

「うん。それだけはダメ」

「そうか……」

クロノは頭を抱えた。

人体複製に関わる研究を再開したというプレシアの居場所を、フェイトは頑なに話さないのだ。

それがフェイトの選択であった。

やはり、母に想いを捨てさせることはできなかったのである。

「……そろそろ時間だな。昼食にしよう」

「あ、うん」

クロノは現時点でのプレシアの逮捕について、ほぼ諦めていた。それよりも優先させなければならぬ課題は山積している。

最早プレシアは悪意を持ってクロノの量産を行うような、救いの無い犯罪者ではないと確定した。

ただ、フェイトを作り出した完全複製技術プロジェクトFが他の違法研究者の手に渡らないように、警戒していなければならない。

そのためにも次元航行艦『アースラ』をここから動かすわけにはいかなかった。

そうなると移送手続きが少々ややこしくなる。
護送艦の手配をしなければ。

フェイトの証言から事件の全容が明らかになり、戦闘を含む搜索等がしばらく必要なくなるとわかつているため、現地協力者であったなのはとユーノは自宅に戻り、元の学生生活に帰っている。

ユーノは『ロストロギア』を埋め込まれたというピュアに興味を持ち、数日に一度はアースラを中継して色々と話聞いていた。

そしてピュアである。

髪の毛、肌、そして瞳までもが白一色に統一されている異常な容姿の、病弱な少女。

フェイトやアルフの証言では、完全に巻き込まれただけの次元漂流者にして協力者。

しかし、フェイト側にとっては彼女がいなければ解決には至らなかったと断言してしまえるほど、この事件の重要な鍵となった人物である。

まず、『ジュエルシード』探しについて、彼女のその魔法は凄まじい威力を発揮した。

詠唱には時間がかかるようだが、使ったびに1つは『ジュエルシード』が発見されていたのだ。

『アースラ』の設備をフルに活用した時と同等かそれ以上の性能を、個人が使う魔法が発揮していたのである。

次に、次元震が起こった戦闘の後。

フェイトは手の平を中心にそこそこ深い傷を負い、疲労も激しかったのに、ものの数分ではほぼ全回復と言っていていいほど回復させてしまったのだ。

さらに。

ピュアはプレシアの所に自ら乗り込み、何かを話したらしい。

話の途中か、プレシアは持病の発作で倒れてしまったが、それをきっかけに自分がやっていたこともすべて話し、フェイトとも向き合うようになったのだそう。

プロジェクトF

これはフェイトが完全複製技術の産物、つまり人造魔導師であると知っていれば、まず不可能だと言える奇跡的な出来事であった。

プレシアに必要なだったのは死んだ娘のアリシアで、当初プレシアはフェイトを娘とは認めていなかったのだから。

『ジュエルシード』をすべて集めたところで用済みとして切り捨てられ、つまり殺されていた可能性は高い。

管理局で捕らえたところで、まずその耳に言葉が通じるかどうかから試す必要があり、解決に持ち込むには膨大な時間が必要だっただろう。

ちなみに何を話したのかは、『自分の身の上を話した』と誤魔化すばかりで、ピュアは一切話さない。

フェイトもアルフもその場にはおらず、内容を知るのは聞いたプレシアと話したピュア本人のみ。

ここまで来ると、最早ピュア一人で事件を解決したようなものだった。

だが、ピュアは、ある余計な証言をしてしまっていた。

プロジェクトF

つまり、今現在プレシアが最後と定めている完全複製技術の、完成への最後の道標を、ピュアが示したというのだ。

これは違法研究補助、れっきとした犯罪である。

さらに、自身に埋め込まれた『ロストログア』の使用についても、違法性を認識していたという証言が出てきている。

一応、所持については、ピュアがこれまで関わってきた人間では摘

出が不可能なため、情状酌量の余地を認められる。

しかし、使用に関しては明らかに事情が異なってくる。

フェイトかピュアのどちらかが違法性を認識していれば、認識していた方に罪が向かう。

今回は悪用とは言い難い用法ではあるのだが、使用された『ロストログア』の危険度が高すぎた。

『ウィジャボード』は次元を超えて目標に直接『接続』することで、あらゆる距離を無視して魔法を届かせることができる。

それだけならばそれほど危険度も高くないのだが、あらゆる防御まで無視してしまう特性があるのだ。

つまり、殺傷設定の弱い魔法でも、簡単に『接続』した対象を殺害できるのである。

防御を無視できるという話は、フェイトもアルフも知らなかった。

ピュアが黙っていたためだ。

フェイトが『ウィジャボード』の正確な危険度を知らなかったのならば、低い方の危険度で判定が行なわれ、精々指導か補導程度で済む。

それを見越して、ピュアは黙っていたのである。

ただし、これに関しては別の証言もある。

『時の庭園』に記録されていた、管理局の法律を記したデータの内、『ロストログア』に関わる部分が削除されていたと言うのだ。

おそらく、フェイトやアルフが確認するのを防ぐ意味で、プレシアが削除したと思われる。

だから、あの時点でピュアが管理局の法律に目を通す機会は無かったのである。

これに関して、両者の証言が矛盾しており、現時点では確認することもできないため、どちらを信用するか、ということが焦点となる。

「クロノはどっちを信用したいの？」

供述調書を読んだリンディは息子のクロノに聞いた。

英才教育を受けたエリートとして何度も修羅場を潜ってきているとはいえ、クロノはまだ14歳の少年である。

こういう時の法律の『利用法』について話しておくのは、年長者の仕事であつた。

「アルフの証言を信用するように持って行きます」

「不正解」

「え？」

「法律は自分に直接関係の無いものまで目を通しておくように」

と言つてから、模範解答を提示する。

「次元漂流者特例法、第2条2項を適用します。

倫理基準が違つていることもあるのだから、今回に限り細かいことは不問にするように」

「細かいことつて……それでいいんですか？」

「今回限りよ。」

ピュアさんに悪意は無かつたわけだし、

ピュアさんの故郷がどこにあるのか、見つけ出すことがほぼ不可能だからこそできる、裏技ね」

実際、次元漂流者が元の世界に帰還できた例は皆無である。

法律としても半ば適当気味で、全3条。地球で言えばA3用紙1枚分と非常に短い。

次元漂流者に遭遇する確率が非常に少ないこともあって、管理局員ですらその法律の存在を知っている者は全体の2割ほどである。

「保護法じゃなくて特例法……あ、あった……日付が60年前……よくこんなの知ってましたね」

話を聞いていたエイミィが呆れ気味に呟く。

「えへん。伊達に提督はやってません」

リンディは胸を張る。

『次元漂流者特例法』。

内容は保護前に問題を起こした次元漂流者についての対応を定めた法律である。

大雑把に、第1条は悪意がある場合、第2条は悪意が無い場合、第3条はそれ以外の場合となる。

まさに今のピュアの状況に一致した法律であった。

「ピュア、有罪になるの？」

「その可能性はあるが、刑罰は発生しない。管理局に保護される前の次元漂流者の行動は、違法な点があっても多少は罰が軽減されるんだ」

「そうなんだ……」

「僕も提督に指摘されて初めて知ったよ」

クロノは苦笑した。

限りなくゼロに等しい確率だが、次元漂流者が保護前に犯罪を起したり巻き込まれたりというケースがあるのだ。

保護前という事は管理局の法律を知らない可能性があるわけで、知りもしない法律に基づいた行動を求めるのは酷である。

そういう場合、どうするのか。

次元漂流者の故郷の法律で判断するのである。

故郷がわからない場合、大抵は罰が大幅軽減されることになる。悪意が認められない限りは、だが。

「特に今回、あの子の行動は『ロストログア』事件の解決に大きく寄与している。

裁判官がそれを考慮すれば、無罪も十分ありうる」

「そう、よかった」

フエイトはホッと溜息をついた。

自分の家庭の事情やワガママのせいで恩人であるピュアが犯罪者になってしまうのではないかと、話を聞いてから気にしていたのだ。

「さて、特例法の手続きのために1つ聞きたいんだが、君の故郷の名前はなんて言うんだ？」

「シェオールさ」

ピュアはクロノの質問に答える。

隣に控えていたエイミィが即座に『アースラ』のデータベースにア

クセスし、検索を開始した。

『アースラ』のみのデータベースとはいえ、任務で出航する直前の最新データであり、量は豊富にある。

主に、管理世界、管理外世界、過去に滅んだ無人世界の3種から検索される。

そこから、該当する名前の世界が無いかどうか探すのだ。これも必要な手続きの一つであった。

次元漂流者が元の世界を発見、帰還できたケースは皆無。ゆえに、今回も発見される可能性は限りなく零に近かった。

だが。

「シェオールだって!？」

クロノは思わず聞き返す。

「え、どうして?でも……」

エイミイも戸惑う。

そこは、ミッドチルダから次元航行連絡船で1時間という近さにある。

「200年前に滅んだ無人世界だぞ……?」

「多分、そつだと思つたさ」

ピュアは目を伏せて言った。

「ミッドチルダとシェオールは敵対していたさ。」

シェオール魔法が知られてなくて、ミッド語が標準になってるさ。

それなら、シェオールは滅んだんだと思うしかないさ」

第9話 事情聴取（後書き）

第九話。

原作にはなかった、取り調べのシーンです。

ピュアについては保護のついでに、事件についての事情聴取ってところでは。

色々と残念だったり子供らしいミスもありますが、かなり計算高い子です。

勘定に自分自身を入れていないあたり、やっぱり子供っぽいですが。

第10話 シェオール

当時も今の外見年齢のまま、10歳であったピュアは、戦争のことなどほとんど知らなかった。

しかし、今ならある程度はわかる。

何十回と転生を繰り返し、様々な体験をしてきた今ならば。

だが、シェオールが負け、跡形も無く滅んだことに対して、特別な感情は抱かなかった。

戦争とは時にそういうものだし、何よりシェオールにいた頃の記憶が、ピュアには既に無い。

肉体改造を受けて、古代遺失物ロストロギアを肉体に埋め込まれ、転生を繰り返し始めてから、何年が経過したのか、ピュア自身はよく知らない。しかし、薄々ではあるが数百年が経過しているであろうことには気付いていた。

現在の第1無人世界『シェオール』。

かつては高い文明を誇り、古代ベルカと同じくミッドチルダ魔法とは別の、高度な魔法体系を持っていたとされる。

クロノが知っていたのは、シェオールを滅ぼしたのがミッドチルダだからだ。

現在の時空管理局が成立する以前、旧ミッドチルダ共和国が古代ベルカと対立していた頃。

シェオールは古代ベルカ側の味方で、地理的な条件から対ミッドチルダとの最前線にあった。

200年前の時点では既に大規模な次元災害で古代ベルカは消滅しており、ベルカとの同盟世界も大きく混乱していた。

そんな混乱を好機と見て、強大な勢力を誇ったミッドチルダ共和国は、周辺諸国へ大侵攻を開始する。

ミッドチルダ共和国は版図を一気に広げ、それが現在の時空管理局の基礎となるのだが。

その大侵攻でまず最初に滅ぼされたのがシェオールなのである。

記録によれば、ミッドチルダ軍が攻め込んだとき、すでにシェオールは壊滅していたらしい。

1つの次元世界の大半が不毛の大地と化し、わずかな生存者も抵抗したため殺害された。

壊滅していた理由について、当時から様々な噂が囁かれていたそう

だ。

曰く、ミッドチルダ共和国が大量破壊兵器を使用した。

曰く、『ロストロギア』の暴走。

結局、噂の真偽が確かめられることなく、壊滅理由は不明なままである。

同時にシェオール魔法も失われてしまっており、今現在ピュアを除いてシェオール魔法の使い手が存在していない。

だから、ピュアが使う魔法が、多くの人々にとって未知のものに映ったのである。

「そう……」

クロノからの報告を聞いたリンディは静かに目を伏せた。

「これはややこしくなりそうね……」

「教会系の評議員から口出しがありそうだ」

「担当の裁判官が堅物じゃない事を祈るしかないでしょうね」

「マスコミの風当たりはなぜかこっちに向く」

「私達は職務を全うしているだけなのにねえ？」

「まったく」

話を聞いていた『アースラ』の搭乗員の1人が思わず吹き出した。

親子で息がぴったりである。

普段、何かと文句を言い合う2人ではあるが、親子だと考え方が似通うものらしい。

「いつそのこと、今から根回ししておきましょう。」

教会系の評議員に……この供述調書そのままですか」

エイミイまでもが言い出す。

「ピュアちゃんを無罪にしたいのは、私達も同じなんですから」

「そうね」

「そうだな」

上司であるリンディとクロノは止めない。

エイミイの発言は越権行為スレスレなのだが。

「どうせだからミゼット・クローベル本局幕僚議長にも上申してお
くわ。私の所にも調書のデータを回しておいて」

「りょーかい」

『無罪確定したな』とは、『アースラ』ブリッジオペレータの1人アレックスの独り言。

『もし、シェオール人の生き残りが現れたら、どうしようかしらねえ？』

古い友人であるミゼット・クローベルからの相談は、そんな文言で始まった。

普段はあまり使わない、秘匿回線を使つての会話である。

「どうした、藪から棒に」

レオーネは事情を聞く。

昔、時空管理局の黎明期は次元世界を走り回り、活躍したおかげで、今は『伝説の三提督』などとも呼ばれている。

当時からレオーネとミゼットは家族ぐるみの付き合いがあつた。

もう1人のラルゴは仕事上の同僚で、今まで60年以上続く長い腐れ縁となっている。

『いえね、ハラウオンの嫁が直接調書のデータを送ってきたのよ』
「本来は越権行為で注意して終わりだが……なるほど、シェオール人か」

『今、有罪になる確率が3割程度つてところかしら。』

特例法もあるけれど、有罪になるとまずいかもしれないわね』

「うむ。マスコミがシェオール滅亡について嗅ぎ回るような事態にはしたくないな」

『データを回すわ。本人はシェオールの滅亡理由について、何も知らないみたい』

「だが、『機動城塞』について何か知っている可能性はあるだろう」
『口止めをしておくべきかしら？』

「どのような人格か、様子を見よう。下手に藪を突いて蛇を出すのはまずい」

『わかったわ。ラルゴにもその方向で伝えておくわね』
「頼む。こちらは担当する裁判官を選んでおこう」

レオーネは通信を切ると、すっかり白くなった頭を掻いた。
そして送られてきた供述調書のデータに目を通す。

名前はピュア。

これはいわゆる幼名で、まだ苗字は受け継いでいないらしい。
シェオール魔法を使う『祈祷師』と名乗っている。

これはミッドチルダで言う『魔導師』と同じ意味合いがあるようだ。

肉体改造を受け、擬似的な集積器官と、『ウィジャボード』と呼ばれる次元魔力爆撃を可能とする『ロストログア』を、その身に埋め込まれている。

これは本人が転生の中で何度も摘出を試み、失敗しており、ミッドチルダの技術で『ロストログア』を摘出することも、おそらく不可能。

摘出の可否については、現在本局での精密検査待ちである。

本人の話によると、死ぬと同時に転生するを繰り返しており、正確な年齢は本人にもわからない。

ただ、最初に会話した事件の当事者フェイトや、この供述調書を作成したクロノの反応から、誕生してから数百年が経過していると本人は推測している。

また、長い転生生活で故郷の事はほとんど覚えておらず、故郷がどうやって滅んだのかも全く知らないそうだ。

「今すぐどうということはないな。問題はマスコミからの質問攻めか」

レオーネが危惧しているのは、『機動城塞』の噂が立つことであつた。

200年前にシェオールが滅んだ原因は、旧共和国軍による大量破壊兵器の使用にある。

それも隠してはいるのだが、それ自体はある事実のカモフラージュに過ぎない。

本当に隠しているのは、シェオールが所有していた『機動城塞』についてだ。

200年前の大侵攻開始の当時、シェオール攻略に旧ミッドチルダ共和国軍は大きな損害を出し、それでも攻略は進まなかった。

その理由として、襲撃から数分で突如出現する『機動城塞』の存在があつたのだ。

どこを襲撃しても『機動城塞』は出現し、一緒に出てくるシェオールの精鋭部隊が、ミッドチルダ軍の物量攻撃を妨げた。

突如出現する理由を検証していくうちに、召喚魔法が浮かび上がったのだが。

召喚士が数人いれば、いつでもどこでも召喚可能という高度な防衛システムの前に、有効な対抗策は存在しなかった。

業を煮やした当時の司令官は、部隊を一旦退かせて、大量破壊兵器を使用。

シエオールの大地を焼き払ったのである。

その後、その司令官は免職され、大量破壊兵器の使用に至った理由の徹底調査と検証が行われた。

その中で新たな、恐るべき事実が浮かび上がったのだ。

『機動城塞』を防御兵器としてシエオールは利用していたが、攻撃、つまり他の次元世界への転送も可能だったという報告書が出てきたのである。

さらに、人は焼き払われたが『機動城塞』は残骸が見つかっておらず、今もシエオールのどこかで無傷なまま眠っているというのだ。

さらに。

この『機動城塞』の召喚は、転送魔法を使用できる者ならば、数人集めて儀式を行えば誰でも召喚できるらしい。それを否定する材料は何もないのだ。

どういうことかと言うと、転送魔法を使える者ならば、誰でもミッドチルダを壊滅させることが可能だということである。

悪質な犯罪者はこの事実に飛びつくだろう。

また、転移魔法が使用可能というだけで差別や迫害が起こる可能性もある。

実際に『機動城塞』を召喚する術式は発見されていないし、召喚した後に動かす方法もない。

何より『機動城塞』そのものには大した武装が積まれていない可能

性もある。

だが、そうだった旧ミッドチルダ軍を苦しめた、誰でも簡単に召喚できる兵器が存在した可能性が高いという事実だけで、社会が混乱するには十分なのだ。

ゆえに、旧ミッドチルダ軍が大量破壊兵器で次元世界を1つ丸ごと焼き払ったという、十分なインパクトのある事実を半端に隠ぺいすることで、真に知られたくない事実から目を逸らさせているのである。

実際、ジャーナリストの何人かは大量破壊兵器について何か掴んだらしく、他の疑惑と一緒に本を出版していた。

しかし、狙い通りにそこで追求が止まっている。

リンディや他の『アースラ』搭乗員がその辺りの事情を知っているわけではないが、彼女らがピュアを無罪にしたいという理由で直接ミゼットまで報告を上げたのは、僥倖（運が良かった）と言っている。

「後は口止めのタイミングと方法だな」

海鳴市臨海公園。

「なのはに紹介したい子がいるんだけど、いいかな」
「うん？」

フエイトはタイミングよく転送されてきた、状況が掴めていないピュアの手を引いて、なのはに言った。

間違いなくエイミィの仕業だ。

傍で見ていたクロノは頭を抱えるも何も言わない。

おそらく母リンディも1枚噛んでいるのだろう。

あの母なら、嬉々として許可しそうだ。

「この子がいなかったら、母さんは死んでたかもしれない。

それに、決闘の日の念話を届けてくれたのも、この子なんだ」

「あ、あの時の……」

「え、うん……？」

ピュアは戸惑う。

まさか紹介されるとは思わなかった。

特に接点も無いはずなのに。

「私、高町なのは。よろしくね」

「えっと、わたしはピュアさ。よろしくさ」

戸惑いながらも互いに自己紹介する。

顔合わせはこれは初めてだった。

「凄いんだよ。地球に来てから8日ほどで7つも『ジュエルシード』

を探し当てたのは、この子のおかげなんだ」

「へえええ！それスゴイの！」

フエイトが自慢げに話し、なのはは目を丸くして驚いた。

なのはは『ジュエルシード』を探すのに、かなり苦労していたのだ。それをほぼ1日1個のペースで探し当てていたとなると、その凄さ

が身に染みてわかるというものだった。

その後、フェイトとなのはがリボン交換をして別れる。

「似合ってるよ、ピュア」

「うゝ……」

ピュアの頭には、半ば無理矢理付けられた、白と黒、2本のリボンが揺れていた。

ピュア自身はリボンのように交換できるものを持っていないこともあり、リボン交換を固辞しようとしたのだが。

フェイトが是非にと捕まえ、なのはが任せると悪ノリしたのである。当然ながらピュアの腕力で抵抗できるはずもなく、いいようにされてしまった。

フェイトとなのはの初の共同作業であった。

第10話 シェオール（後書き）

第十話。

原作無印はこれで終了となります。

シェオールの設定はリメイク前、あんまり考えていませんでした。元々Asで終わらせる予定だったので。

でも、書いてみると続きそうになったので、祈祷師についてもちゃんと設定を作ることになりました。

そのまま書こうとすると、無印のときに説明してなかったピュアの行動原理が問題になってくるんですよ。

その中で明らかな矛盾が見つかりまして、stsまで書き進められないことが分かり、リメイクすることになった次第です。

ついでに、色々と省略していた部分の説明を追加して、挿入話として原作に重なる部分も入れました。

無印で伏線を張りまくり、Asで回収って流れだったんですが、今回はAsでも回収しきっていません。

特に『機動城塞』の伏線は、stsの終盤まで回収されませんのでご了承ください。

第11話 本局にて（前書き）

冒頭グロ注意。

第11話 本局にて

羊水で満たされたガラスケースの中。
周囲は真っ暗で、何も聞こえない。

ただ、微かな魔力の動きを感じていた。

おそらく、何かの装置で魔法を封印しているのだろう。
魔力が術式に結合せず、魔法が使えない。

擬似視力魔法も解除されていたため、何も見えない。

魔力を通して、感情が伝わってくる。

それは嘲笑だった。

それと、嫌悪と、希望。

なぜこんな、正と負の感情が混ざっているのだろう。
何人かいるのだろうか。

長い間、考えていたが、結論は出ず、やがて考えることに疲れて眠りにつく。

次に目覚めると、左足が無かった。

羊水は温かいはずなのに。

異常に冷たく、異常な違和感。

手で確かめると、そこにあるはずのものが無い。

足の付け根で切断されている。

パニックに陥る。

また嘲笑の気配。

それと、謝罪の感情。

誰かが苦しむ自分を見て笑っている。

そして、それを行なった人間は自己嫌悪と、謝罪の気持ち？

悔しい。

許せない。

謝罪している人はともかく、人が苦しむ様を見て嘲笑うなんて。

魔法さえ封印されていなければ、一矢くらは報いることができたのに。

いや。

確かあったはず。

魔力を直接コントロールし、術式を通さずに効果を発揮させる方法が。

それには修行が必要だが、幸い時間はたっぷりある。

そこに至るための、修練を積む時間が。

何日経ったのか、何週間経ったのか、何ヶ月経ったのか、何年経ったのか。

相変わらず周囲は暗く、虫の音も聞こえない。

少しずつ周囲の魔力を感知する感覚を鍛えていき、自分の魔力の放出、集束でそれらをコントロールする術を開発していった。

既に四肢すべてが付け根から切断されていたが、構わない。
あんなものは飾りに過ぎない。

『 』 して以来、上手く体を動かせなくなった自分にとっては、
有っても無くても大して変わらない。

ついに、コツを掴んだ。

復讐の時は来たのだ。

魔力とはエネルギーである。

あらかじめ放出しておいた魔力を異常に集束させることで、それは
鉄をも溶かす高温となる。

それを動かし、周囲のすべてを焼き払った。

『戦果』は、ガラスケースに伝わってくる鈍い振動でわかった。

天井を崩し、瓦礫ですべてを押し潰す。

自分の入ったガラスケースも壊れた。

しかし、無茶なことをして体に負担をかけたからか、怪我を負って
いないのに吐血する。

構わない。

どうせ、死ねば次へ行くだけだから。

崩落した天井に押し潰され、自分の命は消えようとしていた。
何度経験しても、この感覚にだけは慣れない。
今回は納得済みだから、幾らかはマシだが。

「『…………』…………」

羊水の外に出たからか、男性が何かを言っている声が聞こえる。それは1つだった。

他の者は天井の崩落に巻き込まれて死んだのか、全く声が聞こえない。

「『…………』…………」

男はずっと同じ単語を繰り返している。

悔恨、諦め、嫌悪、深い悲しみ。
そして嘲笑。

復讐心が、一気に褪めた。

ずっと、彼は1人だったのだ。

嘲笑とは、ガラスケースの中の自分を嘲笑っていたのではなく、彼自身の罪深さを嘲笑っていたもの。

嫌悪とは、自己嫌悪。

希望とは。

おそらく、切断された四肢で、彼の大切な誰かを救いたかったのではないだろうか。

ずっと同じ単語を繰り返しているというのは、彼の助けたかった大切な人の名前。

自分は、勝手な勘違いで、彼と、彼の大切な人を殺してしまったのである。

「ごめんなさい」

それがこの世界での、最期の言葉となった。

それからだろう。

死に物狂いで、感情の向きを感じ取る練習をした。
もう、あんな酷い勘違いをしなくなかったから。

そして、自分が何を奪われてもどうともならない、どうしようもない残骸であることに、気付かされた。

欲しいものはもう二度と手に入らない。
失って困るものは何もない。

そう、四肢でさえ。
いや、命でさえ。

終わった悲劇の主人公。
終わった物語の主人公。
人生が終わった後の、これは余生。

もう二度と、あんな酷い後悔はしなくなかった。

だからこれは、自分の自己満足。
ただのお節介。
偽善ですらない。
自慰行為。

勝手に首を突っ込み、自分1人で満足して終わり。

だが、失って困るものは何もなく、失いたいものは幾つかある。
欲しいものはたった一つ。
もう、永遠に手に入らない。

代償が必要なら、どうぞ遠慮なく。
こんな、悲劇の残骸でよければ。
いくらでも。

「終わりましたよー？」

精密検査の途中で眠っていたらしい。
身体を検査されることなど久し振りだったので、夢を見ていた。

ピュアはペンキを塗ったように真っ白な自分の手を眺める。
ところどころ、うっすらと細くて赤い血管が走っているのが見えた。
転生すれば、切断されていても元通りに再生される肉体。

起き上がって、頭の後ろで揺れる違和感。
思い出した。

フェイトとなのはという、2人の少女から半ば無理矢理渡された、
白と黒のリボンだ。

次に転生するまでは、2人との友情の証。

しかし、転生には、この手のアクセサリは持つて行くことができない。

だから、ピュアは断った。

それでもと、2人は無理矢理髪の毛に結びつけた。

「とりあえず、擬似視力や自動浮遊などのサポート魔法の入ったデバイスを渡しておきますねー」

緑髪の白衣の少女がピュアに言った。

名はマリエル・アテンザという。

「魔力があればとりあえず機能するはずですので、一度試してみてください」

「はいさ」

ピュアは受け取る。

どうやら、眼鏡型のそのデバイスは、肉体の動作をサポートするタイプのものらしい。

簡易型の医療補助タイプで、電池のようなカートリッジで動くタイプも存在するようだ。

今回渡されたものは特別製で、ピュアが使用するシェオール魔法のデータを記録する機能がある。

つまり、シェオール魔法対応デバイス開発の一環でもあるのだ。

『ジュエルシード』事件の報告書から、ピュアが使うシェオール魔法が注目され始めていた。

詠唱に時間がかかるのは難点だが、それを差し引いて余りある強力

な効果は魅力的である。

ピュアの他にもシェオール魔法を使用可能な魔導師が増えれば、それだけ任務の遂行も容易になる。

また、ミッド式とベルカ式両方の適性が低い者の中にも、シェオール魔法を使うことで高い能力を発揮できる者が出てくるかもしれない。

それは管理局全体の戦力の底上げに繋がる、大きな可能性であった。

裁判が始まるまでの数日は、管理局技術部の宿舎で寝泊りすることになる。

精密検査の結果が出るまで、とりあえず一通りシェオール魔法のデータを取るのだ。

本局に帰還した次元航行艦『アースラ』の整備と並行するので、大体1日に1時間程度のデータ採取になるが、ピュアの体力から考えても妥当なところだろう。

「かわい〜!」

「モフモフさせてえ、クンクンさせてえ、ペタペタさせてえ!」

「どっせええええいつ!!」

「ぐふおっ!？」

とりあえずマリエルは、鼻息の荒い変態を脇腹への、腰を入れた空手チョップで沈める。

自分の口からやけに野太い声が出た気がするが、多分気のせいだ。

技術員には数種類の人種があり、その1つに外部からアイデアを集めようとして、その影響を最大に受けてしまい、変態の道に入っ

しまった者がいる。

違法研究者になるよりはマシだが、同僚の部屋が薄い本で埋め尽くされていくのは、筆舌に尽しがたい絶望感があった。

それはまあ、マリエルも女子なので、少しはそちらにも興味があったが。

ルームメイトの女子は頬が緩んだ程度だったので、安心できた。

最近、今地面に平伏す変態に洗脳されつつあったのだ。

宿舎に連れてきた理由を説明する。

「へー、じゃあその子が例のピユアちゃん？」

「そうなの。技術者の女の子ってこの宿舎に固まってるから、裁判始まるまで預かってくれたって」

「課長からよね？」

「そう、課長から。さすがに女の子を部屋に泊める勇氣は無かったみたい」

「そりゃそうよねえ」

マリエルとルームメイトの部屋に入って、早速着替えながらガールズトークに入る2人。

ピユアの真っ白な、異様な容姿について、特に気にしている様子はない。

というのも、ここで整備、開発しているデバイスの戦闘データには、形容し難いグロい生物のデータが入っていることも珍しくないためである。

そのため、色が白い人間程度では驚かなくなっているのだ。

「そっいえば教育プログラムの方はどうするの？担当は確かクロノ

執務官よね？」

「えーと、法律の本を渡してあるとかつて聞いた気がするけど」

「あ、電子でーたさ？」

話を聞いていて、ピュアは声を上げた。

現在、ミッドチルダでは紙媒体は廃れていて、本の形をした携帯端末に書籍データで入れたりするのが一般的である。

検索機能も発達しており、声で命令すれば、欲しいデータがすぐに呼び出せるようになっていた。

魔力で動くデバイスは小型化が容易なため、ピュアの場合は眼鏡型のデバイスにデータが入力されていた。

「教育プログラムのスケジュールは入ってないわねえ。裁判の後から始めるのかしら？」

「『ロストログア』関連の事件のすぐ後だもん。ちょっと時間を置いた方がいいって判断かもね」

「って……うわ、入ってるの教科書じゃなくて六法全書じゃない！」

「え、マジで？……うわあ、ホントだ。何考えてるのかしら？」

ピュアの眼鏡型デバイスを弄りながら、マリエルとルームメイトが話し合う。

一応『情動感応』で2人の感情は読めるのだが、心の声や記憶が無条件に読めるわけではないため、何の話をしているのか、ピュアにはさっぱりわからない。

実はピュアは、機械についてあまり強くない。

転生した先で触れることは何度かあったが、全く理解できないままに、焦りながら適当に操作していた記憶しかない。

元々、シェオールは機械文明よりもオカルト的な魔法が先行して発達していたため、逆に機械の発達は遅れていた。

ちなみに、以前レポートを作った際は、アルフがデバイスの設定を全部やってくれたので、ピュアはただ話すだけでよかった。

だから、デバイスを機械として操作する2人の話に、まったくついていけないのだ。

そしてその内、ピュアの細いお腹がきゅる、と鳴る。

慌てて抑えるも意味などあるうはずもなく。

2人の注目を集めてしまった。

「とりあえずご飯にしようか」

「そうね。お客さん^{ゲスト}を待たせるのも悪いし」

「あう」

ピュアは顔を真っ赤にして項^{うなだ}垂れた。

魔法の実験室。

シェオール魔法の使用データ採取のために、本局内の魔法実験専用の部屋にピュアが1人で入る。

ここは本来管理局の武装隊員等が、自分の魔法の性能テストを行なうために使用する場所だ。

攻撃魔法を実験することもあり、実験室そのものも頑丈に出来てい

る。

最大の売りは、デバイスより高性能で高精度な使用データが得られることだ。

そのデータを参考に術式に手を加え、任務に合わせるなど最適化していくのである。

今回のピュアのような未知の魔法のデータ採取にも、多く利用される設備であった。

「いいですよー、テイク1、いつてみましょう！」

『はいさ』

モニタの向こうのピュアに声をかけ、実験開始。

マリエルは、この時点でシェオール魔法を甘く見ていた。

もちろん、攻撃魔法を試すわけではない。

ピュアには攻撃魔法全般の適性が無いのだ。

体の負担の少ないものと注文をつけたし、そうそう怪我人が出るようなことにはならないだろう。

そう考えていた。

最初に使用するのは翻訳魔法。

ピュアの説明では、その言語の基礎形態を熟知していなければ上手く自動翻訳されないという、大きな欠陥のある魔法とのこと。

その説明からするに、どうやらミッド式では廃れた、単語変換形式でやっているようだ。

現在のミッド式では、念話を応用した意識方式を取っている。

これは相手の脳波を読み取って単語に変換する方式で、距離によっては翻訳されないという欠点はあるものの、意思疎通の精度が段違

いで、言語の違いによる翻訳魔法のかけ直しが必要という、画期的な手法であった。

この翻訳魔法に限ってはミッド式の方が優れているようだ。

『 、 』

歌うような、清らかな旋律の詠唱が、白い唇から紡がれる。

声を掛け難い、^{がた}荘厳さを感じさせる空気がそこに形成されていた。

青い魔力光で、独特の魔法陣が展開される。

3つの円を2重の線で結んだ三角形が2つ、それぞれ逆方向に回転していた。

三角形の1つはベルカ式のものにも似ている。

ミッド式やベルカ式と同じ、『アルハザード魔法系』と呼ばれる系列であることは、間違いなさそうだ。

特殊な魔法体系というのは、シエオール魔法に限ったものではない。辺境へ行けば、こういった未知の魔法は幾らでも転がっているものだ。

特にシエオールはミッドチルダのほぼ隣に位置していたため、『アルハザード魔法』から進化した、あるいは退化したものであることは、容易に想像が付いた。

『^{ベプシマーン} 翻訳開始”』

こう、もやもやとした、残念な気持ちは一体何なのだろうか。

何かが。

とても大切な何かが、台無しになった気分がした。

膝から力が抜けかけるのを我慢しながら、マリエルはモニタを切り替えて確認する。

プログラム

術式に使用されている言語の違いから、詳細までは解らなかったが1つ解ったことがある。

『うにゆ、に^{斜め}にやにやめーにやにやじゆうにやにや《七十七》度のに^{並び}やらびでに^{泣く泣く}やくに^{嘶く}やくいに^{ナナハン}やはんに^七やに^難や台に^{なく}やくに^{並べて}やらべてに^{長眺め}やがにやがめ』

「かわいいーい！」

「ぶっ、げぼっ」

マリエルはピュアの語尾の変化と、変態の道に入った同僚の反応を華麗にスルーしようとして失敗し、むせる。

「ねえマリー」

「けぼっ、へえ？」

「もう、ゴールして、いいよね……？」

見ると、変態の道に入ってしまった同僚が頬を紅潮させ、ダラダラと鼻血を垂れ流して床に倒れ伏していた。

「ちよっ!？」

尋常ではない出血量に驚いたマリエルは慌てて起こす。

『えっと、大丈夫にや?』

モニタ越しにピュアが声をかけると、幸せそうな顔の同僚の鼻から、

さらに血が吹き出た。

「ええっ!？」

「あれ、お祖母ちゃんが川の向こうで手を振ってる……」

「だめえっ、その川渡っちゃダメーッ!!」

攻撃魔法でなくとも人は死ぬのだと、マリエルは改めて知った。

それにしても、ここまで高い破壊力を発揮する非攻撃魔法があるうとは。

シエオール魔法を甘く見ていたと反省する。

『????』

モニターの向こうの真っ白な少女は事態を飲み込めず、きょとんと首を傾げていた。

ちなみに。

その同僚はマリエルの迅速な処置で一命を取り留めたが、シエオール式デバイス開発プロジェクトからは外されることになったそうだ。

第11話 本局にて（後書き）

第十一話、Asプロローグでした。

原作では、なのはが魔法の練習をしているくらいのところです。

地球での話を書いてもよかったのですが、フェイトの話も合わせて10行足らずで終わってしまう上に、オリジナリティのないツマラシク話になるので、削除しました。
伏線になる話も無かったですし。

シエオール魔法はミッド式やベル力式の大敵です。

それだけに、そのサポートが加われば征く処負け無しとなります。

最後にひと言、かわいいは兵器です！！

第12話 平穏と不穏

次元航行艦『アースラ』を地球に停泊させたまま、クロノとエイミイは今回逮捕した3人、フェイト、アルフ、ピュアを、時空管理局本局に小型の護送艦で移送してきていた。

もちろん、裁判を行なうためである。

とはいえ、地球と言えば検察官に当たる、本局執務官のクロノが有罪にする気がないため、3人とも無罪になる公算が高かった。

フェイト・テストロッサは『ロストログニア』の不法蒐集と不法所持のみ。

いずれも母親と信じていたプレシアによる命令で、それをどう使うかなど、まったく聞かされていなかった。

使い魔であるアルフも同様。

最後にけじめの決闘を望んだだけで、管理局への敵対の意思が無かったことが、本人達の証言で解っている。

実際に管理局員との交戦は確認されておらず、最後の決闘後は呼びかけるまでもなく自首し、『ジュエルシード』もすべて返還したため、裁判もかなり早く終わる予定である。

ピュアに関しては少々ややこしい事態が判明している。

元々次元漂流者で、違法研究者から肉体改造を受けており、無限転生を余儀なくされていた。

『時の庭園』に移した際、フェイトの事情に協力、これを解決した。

その時、本人の証言しか判断材料が無いのだが、プレシアが行っていた違法研究の、最後の問題について、解決案を提示したと言うのである。

それが事実なら犯罪だが、プレシアの目的が人道を完全に踏み外し

たものだとは言い難く、また法律を詳しくは知らなかった事情もあり、それを信じたピュアには情状酌量の余地が認められた。

さらに、ピュアの故郷はシェオールという、管理局の前身であるミッドチルダ共和国軍が滅ぼした世界であり、今はもう無人世界なのだ。

裁判の内容も少し難しく、手続きも次元漂流者、保護指定人種、『ロストロギア』所持特別認可と、かなり多い。

フェイトの釈放は早そうだったが、ピュアの無罪放免はまだ少し先になりそうだった。

「クロノ君、ちょっといい？」

「なんだ、ここで話せないことか？」

「うん、多分」

『しょうがないな』とクロノは腰を上げた。

フェイトとピュアに、裁判での心得などを教えていたところである。

「すまない、少し席を外すから、その間資料に目を通しておいてくれないか？」

「うん、いいよ」

「うん、いいさ」

揃った返事が返ってくる。

「そつえば、ピュアってミッド語読めるの？」

ユーノが聞いた。

2人の裁判で色々と言を行なうために、本局に来ていたのだ。

ユーノの質問にアルフとフェイトが苦笑を浮かべた。

「昔とちよつと発音の癖が違っただけだから、大丈夫さ」

「親が言語学者だったんだって」

「下手すると、アタシ達よりよく知ってるよ」

「なるほど……」

フェイトとアルフの説明にユーノは肩を竦める。

要らない心配をしたようだ。

別室。

「なんだ、ピュアの身体検査の結果なら、あの場で話しても良かったのに」

渡された資料に目を通しながら、クロノは幼馴染であり同僚のエイミイに言った。

「ピュアちゃんがさ、『擬似リンカーコア』みたいなので言ってたでしょ？」

それが『ロストログア』認定されるかもしれないんだって」

「それは、どういうことだ？」

クロノは思わず顔を上げて聞く。

「マリーの話なんだけどね。」

宝石みたいなのが胸に埋め込まれて、それが今は魔力集積器官リンカーコアの代わりになってるみたい」

「……………」

クロノは絶句した。

「しかも、『ウィジャボード』と同じく摘出不能。」

こっちは無理矢理摘出するとあの子の命に関わってくるんだって」

「なんてことだ……………」

思わず頭を抱える。

確かに、フェイトやユーノも一緒にいたあの場所で、いきなりしていい話ではない。

特にフェイトは表に出ていないものの、自分が人造魔導師だと知ってから、そう時間も経っていない。

どんなショックを受けているのか、素人で勝手に判断していい状態ではないはずだ。

肉体改造を受けて『ロストログア』を埋め込まれるだけでも、そうそう無い悲劇である。

それが2つ。

しかも、片方は摘出しようとする死ぬ。

原因不明の無限転生も考えると、技術が進歩して摘出可能になったところで、迂闊に手を出すわけにはいかない。

次に転生すれば、また保護できるかどうかはわからず、今度は違法研究者に捕まるかもしれないのだ。

本人に戦闘力は皆無で、犯罪者に目を付けられれば抵抗する術は何もない。

完全に手詰まりである。

「こうなってくると、『アルハザード』に到達した経験があるって
いう話も、本当かもしれないな」

「あの話、信じるの？」

「ミッドの最新技術で手も足も出ないんだったら、信憑性も出てく
るだろ？」

「それはそうかもしれないけど……」

クロノは改めて精密検査の結果に目を通す。

「まずいデータはないな……よし、とりあえずコアの『ロストログ
ィ』認定のことは隠して、結果だけを伝える。

全部教えるかどうかは、裁判の後で考えよう」

「あ、うん。そうだね」

とにかく今は裁判中だ。

精神状態を不安定にすれば、特にピュアが、また何か余計なことを
言い出すかもしれない。

それは、今は避けたかった。

『伝説の三提督』が動いているのだ。

下手を打てば、事態はクロノやエイミィの手に負えなくなる。

そうなるのは出来れば避けたい。

裁判を長引かせればそれだけ、ピュアの負担が大きくなるのだから。

「じゃあ、これは？」

「古代ハナモゲラ言語で『夜の宝石』が語源さ。

古代ハナモゲラは大気が濃くて、星は全部瞬いてたさ。

だからベルカでは『瞬く星』と訳されて、それが他の次元世界にも広がったさ」

「すごい……教会の人でも語源なんて知らないのに……」

クロノが席を外している間、ユーノが持ってきた古文書で盛り上がっていた。

「どこから持ってきたんだ？」

「スクライア一族で使ってる教科書だよ。この間、予備のデバイスを借りていてね。

地球を離れる前に『レイジングハート』からコピーさせてもらったんだ」

「すごいよピュア、古代ベルカ語が普通に読めるんだよ」

「ほう、そういえばシェオールは古代ベルカと交流があったって聞いたな」

現在、古代ベルカ語は近代ベルカ式デバイスを組む際の、プログラム言語としてしか普及していない。

デバイスの音声も、ミッド語とかなり混ざった近代ベルカ語であり、ミッド語の方言のような扱いである。

また、ベルカという世界そのものが次元災害によって失われており、今はミッドチルダの一部にベルカの末裔が住む『ベルカ自治区』が存在しているだけである。

現在は一部の考古学者が古文書解読のために大系化し、辞書にまとめ発音は無視して利用している程度だ。

最近、古代ベルカ式のデバイスが発見されることもあり、そこから発音が判明することもあるのだが、単語と発音を合わせる作業は需要が少ないこともあり、あまり進んでいない。

そういった意味でも、リアルタイムで古代ベルカ語を聞いてきたピユア
の存在は、かなり貴重だった。

同時期。

『なんかゲートボール場にミッド式の魔導師がうろついてるけど、
どうする？』

ヴィータから念話が届いた。

『管理局か？』

『多分な。今どっか行っただけ、あんまり近付かれたら、アタシら
のことバレちまうんじゃないかねえか？』

『それはあるかも知れんな……だが、おそらく別件での調査だろう。
しばらくは様子見だ。』

私達の早とちりで主に迷惑をかけるわけにはいかん』

『わかった。確かにアタシ達を警戒してるにしちゃ、隙が多かった
ぜ』

納得した言葉と共に、念話が切れる。

長い赤髪のポニーテール女性、シグナムは溜息をついた。

『闇の書』が起動してから、もう1ヶ月が経過している。

はつきり言つて、今度の主である少女、八神はやては、今までにないタイプの主であった。

『闇の書』は他の魔法使いから魔力と魔法を吸収する『蒐集』を行ない、666ページに及ぶすべてのページを埋めて完成させることで、真の力を発揮する。

しかし八神はやては、多少なりとも他人に迷惑をかけるという理由から、『蒐集』を禁じた。

彼女は下半身が麻痺しており車椅子生活を余儀なくされているのだが、麻痺の原因が地球の医学では説明できない。

そこから、おそらく原因が『闇の書』による浸蝕であろうと、シグナム達は推測していた。

『闇の書』は、魔力を『蒐集』する気のない主を浸蝕して最後には食い殺し、また転生するのである。

確かめたわけではないが、『蒐集』を行なえば浸蝕は止まり、完成させれば麻痺もいずれば治ると、考えられていた。

それもはやてに伝えてある。

しかしそれでも、彼女は『蒐集』を許可しなかった。

今までの主なら、麻痺を治すためか強大な力を得るために『蒐集』を行なわせ、最後には魔道プログラム体であるシグナム達を『蒐集』して消滅させてまで、『闇の書』を完成させてきたのに。

だから、管理局の魔導師が調査に来ているとはいえ、自分達の勝手な判断で手を出すわけにはいかないのだ。

勝手な行動は、主の意に反するばかりでなく、その想いを踏みにじることになってしまうのだから。

数日後の夜、守護騎士一同がリビングに集まり、情報を整理する。

「臨海公園の方でも見かけた。弱い認識障害をかけていた程度だったが」

青い毛並みの狼はザフィーラ。

「商店街の方にもいました。こちらでも認識障害をかけていたくらいでしたけど……」

短めの金髪女性はシャマル。

「あれからゲートボール場の横の道で何度か見かけたけど、何か捜してるって言うか、パトロールしてるって感じだったな」

赤い三つ編みの少女はヴィータ。

「となると、やはり別件か……」

シグナムは呟く。

この4人で『闇の書』の守護騎士『ヴォルケンリッター』である。

「でも、『地球』って管理外世界ですよネ？」

「何か事件が起きたのだらう。そうでなければ管理局の魔導師がパトロールなど、するはずがないからな」

「ともかく、このままやり過ごせるんならいいんだけどな」

「パトロールの理由だけでも知りたいというのが本音だな」

「ああ、もし次元犯罪者を警戒してのことなら、我らも警戒しておかねばならん」

「はやてに手は出させねえ」

「うむ」

地球では、次元航行艦『アースラ』による、『時の庭園』の搜索と地球に別の次元犯罪者がやってこないかを見回る、パトロールが行なわれていた。

『ジュエルシード』事件に関連した影響の調査もあったのだが、それはもう済んでおり、今はほぼパトロールだけになっている。

守護騎士と希白の魔女。

両者の邂逅は、もう少し先の話である。

第12話 平穏と不穏（後書き）

第十二話でした。

AS原作ではフェイトが裁判に向けてクロノとやり取りしているシーンです。

この話の中ではフェイトは裁判もすぐに終わって、原作よりも早めに釈放されます。

原作でネックだった管理局員との敵対行為、公務執行妨害が無いので、手続きも早いです。

この間にユーノは一時帰省して、正式に地球への滞在許可を取ってきています。

ちよつとだけヴォルケンリッター登場。

パトロール中の管理局員の姿を確認しており、原作よりも慎重になっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1341ba/>

幻想郷の白き魔女【リメイク】

2012年1月14日18時46分発行